一般財団法人日本アジア振興財団（ＪＡＰＦ）

2017 年春期インターンシップ論文集

期間：ベトナム及びカンボジア 2017 年 2 月 19 日（日）～3 月 2 日（木）
　　カンボジア 2017 年 2 月 26 日（日）～3 月 5 日（日）

対象国：ベトナム社会主義共和国及びカンボジア王国

参加人数：31 名
　　男女割合：男 7 名、女 24 名
　　日本国籍者：31 名

参加大学：北海道大学、北海道教育大学、立正大学、早稲田大学、創価大学 、愛知淑徳大学、立命館大学、大阪府立大学、同志社大学、奈良教育大学、京都府立大学、大阪大学、龍谷大学、京都産業大学、関西学院大学、近代姫路大学、同志社大学、京都産業大学、徳島大学、長崎大学、鹿児島大学、北九州市立大学、九州大学、西九州大学、琉球大学

帰国後の活動：(関西での修了式及び事後研修会)
　　日時：3 月 16 日(木)14：00～15：00
　　場所：大阪　在大阪カンボジア王国名誉領事館
　　（関西での修了式及び事後研修会）
　　日時：3 月 26 日(日)17：00～19：00
　　場所：大阪　クロスパル高槻
　　（関東での修了式及び事後研修会）
　　日時：3 月 20 日(月)14：00～17：00
　　場所：　東京都内
　　（福岡での修了式及び事後研修会）
　　日時：3 月 10 日(金)13：00～16：00
　　場所：　博多 リファレンス駅東ビル

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

発行：一般財団法人 日本アジア振興財団学生委員会

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで学んだこと】

西九州大学 教育学部 2 年生

私は中学生のころからカンボジアに興味を持っていた。それは一つの映画の影響である。私にとってその映画は今までみた映画の中で一番衝撃を受けた映画で何度も見ていたのでカンボジアのことは人より知っていると感じていたが、このツアーでその考えは違うと考えさせられた。それは映画では描かれていない迫力、また映画では見えない現地の方々の考え方や価値観の違い、様々なことを改めて考えることができた。それを特に感じたのは１日目に行った KURATA ペッパーでの倉田さんの話を聞いたことである。

ポルポト政権の大虐殺があったことは知っていたが、その当時の日本人が大虐殺なんてないと信じず、国として認めていたという少しでも関与していたというのは全く知らなかった。またポルポトだけが悪いというように考えていたが、それも考え方では違うのではないかということもわかる。ポルポトの話だけでなく、イソップ童話の「アリとキリギリス」の考え方の違い。そこから価値観の違いを学ばせていただいた。日本人にとってカンボジア人は貧しいという印象がやはり多いと感じる。カンボジアから帰ってきたときも友人から「なぜカンボジアに行ったの？」や「かわいそうやったでしょう？」などと聞かれた。倉田さんは日本人だったから分かった考え方を私たちに伝えてくれ、日本人の考え方がすべてでなく、カンボジアの方々は貧しくないということを教えてくれた。私自身も日本人の考え方しかもっていなかったため、ここから学んだ相手の考えもしっかり取り入れ様々な価値観で考えられる人になりたい。倉田さんの話を聞いたうえで見た、キリングフィールドやトゥール・スレン収容所などを訪れ、ポルポトによる大虐殺を身近で感じることができた。そこでは日本人が少なく海外のかた多くみられた。日本人ももう少し興味をもって知ってほしいと感じる部分もあった。一番驚いたのはまだ木や床に血のようなものの跡が残っていたこと。まだそんなに時間がたってないことを感じられた。

私はカンボジアについて知ることができたならこれからもカンボジアのことを知ってカンボジアの方々と交流を持てる日本人でいたいと思う。そのようなカンボジアの文化を考えたうえで日本がカンボジアの方々に協力を一番しているのは教育面だと考えられる。私は将来教育者として子どもたちの前に立つ人になりたいと思っている。その中でカンボジアの先生もしたいと考えていた。だがその目標はただの願望で明確には見えていなかったし、カンボジアの子どもたちを助けたいという考えから生まれたものであったので価値観の違いを知ったうえでその考えも迷惑なんじゃないかと感じた。だが TAYAMA 日本語学校や孤児院にいって子どもたちを見て、私が助けたいではなくて、私はこんな勉強に積極的でこんなにも楽しそうに輝く子たちに勉強を教えたい。子どもたちに教えるのではなく、子どもたちから教わることが多くあり、いつの間にか私がカンボジアの子たちのとりこになって

いた。こんな輝くことができるなら同じ人間である私たちも勉強にもっと興味を持って学ぶことができるだろうし、何年も勉強している英語が流調に話せないことに恥ずかしく感じた。「こんなにも勉強に希望をもって頑張っている」ということを私が先生になったとき日本の子どもたちにも教えられるようになって子どもたちに勉強を楽しいと自分から感じられるような環境を作りたい。カンボジアの子どもたちのおかげで少しずつだが、自分の目標が明確になり始めたと感じる。また中学生のころからの、いつかはカンボジアで先生をしたいという無謀な目標もアキラー地雷博物館や KURATA ペッパー、また日本語学校の先生などカンボジアに住む日本人の方々の活躍も聞くことができ、身近に感じた。

私はこれから自分が本当にしたいことを考えてそれには何が必要か。カンボジアの方々だけでなく、一緒に学んだ仲間、そして引率の方から学んだことを自分の力にできるようしっかり深めていきたいと思う。このような経験をさせていただきありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【今回のツアーで学んだこと】

大阪大学 経済学部 1 年生

観光などで海外に行くと、その国が売りにしている名所を訪れ、料理に舌鼓を打つ、これで満足して後はお土産を買って帰国するのが通例ではないだろうか。僕はもともとこのツアーにはアンコールワットが楽しみという観光目的の理由だけで申し込み、カンボジアの歴史など一切知らなかった。そんな僕にとって今回の研修は、多くのことを学ぶきっかけになった。

今回の旅で学んだことは、「いろいろな角度から物事を知るべき」ということです。もともと僕はボランティアには興味があり、漠然と発展途上国の手助けをしたいと考えていた。しかし、このボランティアをしたいという気持ちは、半分正しくて半分間違っていることに気づいた。それは、日本がカンボジアより発展しているからカンボジアの人より裕福な暮らしをしていると勝手に思い込み、遅れている国を自分の国のようにしてあげたいという考えを無意識のうちにしていたからだ。それは短絡的な考えだと今回の研修を通して学ぶことができた。カンボジアでは国の風土に合った暮らしをしている部分もあり、自国と違うところを遅れていると考えるのではなく、文化の多様性ととらえることができると思った。しかしその一方で、カンボジアにはまだまだ不十分な点があると感じた。特に気になったのはインフラと医療と教育。インフラにおいては、都市部のほうしか道路が舗装されていなかった。カンボジアは観光業に力を入れているので、プノンペン、シェムリアップ等、４つの観光都市を円滑につなぐものができれば、観光者の選択肢が広がり、海岸エリアなどに訪れる人がおおくなるのではないかと思った。医療と教育では、これらの職業に就くには知識が必要不可欠。カンボジアではクメールルージュと内戦によって知識層の人々が激減しており、これら二つの職業に携わる人が不足しているのが現状だと知ることができた。医療と教育においては文化と切り離して考える必要があると思う。この二つは改善を急ぐべきだと思う。僕はこの８日間で、他の国の現状を知り改善点を考えるという、今までの勉強生活では全く行ったことのなかった経験をした。僕はボランティアをしたいと謳っているのに、何も知らない自分が恥ずかしくなった。また、今こうやって考えることができるのは直接この目で見て、現地の人に生の声を聞いたからだと思う。たくさんのことについて学ぶことがこれからの大学生活で発生すると思うが、情報を鵜呑みにせず、様々な角度から知り、自分の中で考え、そして意見や支援という形で発信していく。この行為を大事にしなければならないと研修を通して実感することができた。

また、今回の旅で記憶に残っているのは、TAYAMA 日本語学校、孤児院、農村などで出会った現地の子供たちだ。カンボジアの教育は教師不足という課題が残っている。その中で支援やボランティアなどで用意された教育に感謝し、全力で頑張っている子供たちのエネルギーには圧倒された。普段当たり前のように授業に参加し、漠然と授業を受けて点数に一喜

一憂する今までの自分の勉強はいかに生産性のないものか実感した。これからはカンボジアの学生のように、自ら知りたいということについて一所懸命にがんばりたいと思う。TAYAMA での日本のことについて紹介すプレゼンテーションでは、僕の言葉一つ一つに興味を持ってくれ、その中で見せてくれた驚きの表情や笑顔は忘れることができない。また孤児院・農村では現地の子供たちと遊ぶ機会があった。僕はクメール語がわからないため直接言葉を交わすことはできなかったが、遊びを通して気持ちを伝えあうことはできたと思う。やはりスポーツ、音楽、笑顔は世界共通の言語にかわるものだと思った。

また、今回の旅では北海道から九州まで、様々な所から学生が集まって生活を共にする研修だったため、色々迷惑をかけたが彼らと一緒に旅ができて本当に良かった。カンボジアの現状についてみんなで学び、夜のディスカッションで共有しあうことで、一人で分かったと思い込んでいたものが実は間違っていたり、違う切り口から考えることができたりした。今回出会えたこの仲間は一生の財産だと思う。

この研修では自分の今までに知らないことにたくさん出会うことができ、それによって自分のしたいこと、しなければならないこと、していきたいこと、これらを学ぶことができた。あと大学生活は３年しかないが、残りの時間を将来のためにどう使うか考えることができた。本当に感謝している。また JAPF の引率の方には本当にお世話になった。僕自身かなりどんくさい部分があるので、ひやひやさせたりする部分がたくさんあったと思う。そんな中でもささいなところにまで気をかけてくれて体調などを気遣ってくれた。おかげさまで初めての海外旅行でも無事に過ごすことができ、さらにたくさんのことを学ぶことができた。ありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【価値観の多様性を理解する】

同志社大学 法学部 1 年生

私は、今回このベトナム・カンボジアスタディーツアーに参加して、価値観の多様性を理解することの重要性を改めて実感した。それは、主に次に挙げる２つの理由からなる。

まず１つ目に、KURATA PAPPER の設立者である倉田さんのおっしゃった言葉である。それはこのようなお話であった。「もし、カンボジアで私たちの目の前に裸の少年が歩いていたら、私たちは私たちの持つ価値観で判断をし、彼を可哀想な子だと見なすであろう。しかし、実際には、彼はカンボジアの暑い気候ゆえにそのような格好でいるだけであり、決して彼が貧しいという理由からではないのである。」私は、この話を聞いて正直かなり衝撃を受けた。なぜなら、可哀想と思う感情からスタートして、支援をしたいという気持ちを生み出す一連の流れは一種の同情を含むものにせよ、客観的なものであり、被支援国にとって有益であると考えていたからである。しかし、倉田さんのお話を聞いて、このような私たちの考え方は、カンボジアの人々にとって、私たちの持つ価値観の押し付けに過ぎず、主観的なものの見方であるということに気付いたのである。文化や宗教、先進国と発展途上国など、各々の基盤の上で成り立っている他国を理解することは難しいことであると思うし、もしかするとその相違を完璧には受け入れることは出来ないかもしれない。しかし、これからは、カンボジアで聞いたこの倉田さんのお話を心に留めて、上辺だけの理解にとどまらないようにする努力を怠らず、様々な価値観を自分自身の中で養っていきたい、と強く感じた。

次に、上記のように思った理由のもう１つの点は、農村での生活・農村にある学校を視察した時に感じたものである。それまでは、カンボジアの農民は、自給自足をしていて決して裕福ではないと聞いていたので、私は、全ての農民が苦しい生活をしていて、極端な言い方だが彼らは幸せではない、と思っていた。しかし、農村を訪れてこの考え方は 180 度変わった。なぜなら、農村にある学校で学ぶ子供たちは日本の学生とは異なり、目を輝かせながら貪欲に学ぼうとしているし、家のある一帯は、騒がしい中心街とは一線を引いて、私たちの世界とは異なる時間が流れているようであった。私は、この光景を見て、彼らの生活は決して不幸せであると呼べるものではなく、彼らのことを幸せではないと思っていた自分をとても恥じた。むしろ、見方によれば、何不自由なく、満ち足りた生活を送ることができている一方、様々な IT 機器、情報やストレスなどに囲まれた私たちの方が不幸せではないのか、と感じてしまうほどであった。つまり、幸せの形は様々であるということをまざまざと思い知らされたのである。

まとめると、この 12 日間の研修を通して、１つのことに対する価値観は、私が思っているよりもたくさん存在し、決して正解はないということを、私は身をもって知ることができた。自分とは異なる考え方を受け入れることは、決して簡単なことではなく、私自身、この研修中にも驚かされることばかりであった。しかし、今回のこの貴重な経験を無駄にするこ

となく、私は、これから出会う様々な課題にひとつひとつ真摯に向き合っていきたい、と思うことが出来た。

最後に、この研修に参加出来て本当に良かった。引率の方、現地ガイドの方を含め、JAPF のスタッフの皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【幸せとは】

北九州市立大学 外国語学部 1 年生

ツアー中、1 日の終わりのディスカッションでは教育格差、医療格差、観光業などカンボジアの様々な問題について議論した。他大学、他学部のメンバーとのディスカッションは学ぶことばかりで、大変有意義な時間となった。こうしたメンバーとの意見交換を通じて、「幸せとは」なんだろうと考えるようになった。

カンボジアを訪れる日本人は自国と何もかも違うカンボジアを見て、日本に生まれてよかったと思い、日本の魅力を再認識することが多いだろう。しかし、私は今回のツアーを通して、日本が素晴らしいということはもちろん実感したが、それ以上にカンボジアの魅力に気づかされた。確かにカンボジアは日本と比べると、衛生面、教育、医療など、多くの面でインフラが整っていない。医療においては、設備の老朽化が激しかったり、病床が足りず廊下での入院を余儀なくされる患者が多くいたり、エレベーターがないため、大人四人で階段を上り下りしながら患者を運ばなければならなかったりと、環境が整っていない現状を目の当たりにした。教育においては、給料が低いということもあり、教師の数が足りなかったり、そのため生徒は学校へ授業を受けに行っても自習をしなければならなかったり、親の仕事を手伝うため学校へ行かず、働く子供たちがいたりと、子供たちが十分な教育を受けているとは言い難い環境を目の当たりにした。ゴミ山で生計を立てる人々、道で物乞いをする子供たちも目にした。こうしたカンボジアの現状を知っていく中で、全てポルポト政権時代の粛清による後遺症なのだと感じた。貨幣、学校、宗教等の廃止、家族制度の解体、知識人の大量虐殺、記録書の焼却。ポルポト政権前、カンボジアは栄えていたという話を聞いた。もし、ポルポトによる政権がなかったら今、カンボジアはどうなっていたのだろうか。カンボジアの歴史はポルポト時代に悪い意味でリセットされたのだと感じた。これはベトナムでも感じたことだか、戦争による影響は計り知れず、洗脳や価値観の違いというものは刃物になり得ることがある。本当に恐ろしいと思った。しかし、良い方向に考えれば、カンボジアは「これから」ということだ。引率の方が「私がなぜこんなにもカンボジアに惹かれているのかは、カンボジアはこれからの国で、現在の先進国と同じ道をたどることもできるし、先進国が発展してきた中での教訓を取りいれて、より良く、独自の発展を遂げることもできるというところにある。」ということ言っていた。確かに、国が発展していく過程を見ることができるのはとても興味深いし、自分たちがその歴史的な発展に参加することだってできる。カンボジアは奥が深いなと感じた。

カンボジアにはこうした戦争の影響による悲しい現状が多くあるが、「幸せ」とは必ずしも「国が発展している」とは結び付かないということを、カンボジアを訪れて、改めて感じた。私の目には少なくともカンボジアの人たちが幸せそうに見えた。確かに、学校に通えない子供たち、物乞いをしなければ生活できない子供たちは幸せとは言えないのかもしれな

い。必要最低限の生活ができなければ、なかなか幸せと感じることはできないのかもしれない。そうした人たちが必要最低限以上の生活ができるようにしていくことは大きな課題である。また、私はカンボジアの人に幸せな気持ちにさせられた。それは、彼らの笑顔と丁寧な挨拶のためかもしれない。彼らは必ず手を合わせて、「チョムリアップスオ」や「オークン」と言って、笑顔を向けてくれる。挨拶や礼儀に重きをおく日本人にとって、親近感が感じられ、気持ちがいい。彼らの笑顔を見ると、心が温かくなり、幸せな気持ちになった。。

幸せの感じ方は人によって違い、幸せとは何かを言葉で表現することは難しいけれど、私はカンボジアの人たちの温かさに触れ、また、いろんな問題を抱えながらも生活している人たちの笑顔や幸せそうな様子を見て、幸せな気持ちになったし、カンボジアのことが大好きになった。カンボジア最大の魅力は人の温かさだとツアーを通して感じた。たった 12 日間ではあったけれど、帰国してからのカンボジアロスは大きい。そのくらいカンボジアのこと、そしてカンボジアの人たちが大好きになった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【発展途上国の支援において国民性を理解することの必要性について】

北海道大学 農学部 2 年生

私がこのツアーに興味をもったのは、大学構内のポスターに書かれていた「本当の支援って何だろう」というコピーに心が動かされたからである。日本は ODA はじめ発展途上国に援助を行っているが、その資金が必ずしも支援につながらず、指導者たちに悪用されているという現実が少なくないことを以前から知っており、「支援」という言葉が自分の中でいささか引っかかったのである。このツアーに参加すると決めた後、事前学習を進める中で、カンボジアはアジアの中でもインフラ、教育、医療など様々な面で発展が遅れている国だと知った。この事実の根底にある原因、国の事情をこのツアーでは学び、考えることができたと思うのでここに述べる。

カンボジアは GDP という金銭的な指標では、発展途上国として考えられる。実際、交通インフラの未整備、地方のライフラインの未発達、農業、観光業以外の産業の未発展、教育・医療制度の未発展などを事前学習、現地での学習を通じて感じた。この現状に対しては先進国から援助が行われており、既述した同国の未発展部分が今後改善されていくと考えられる。ただ、カンボジアの発展を考える上で私には一つ気になることがある。それはカンボジア国民の国民性である。

日本で生活したことのあるガイドさんによれば、日本での生活は時間に追われ忙しく、カンボジアに帰ってきてからは周囲の人がのんびりと生活しているように感じているようだ。また、研修の訪問先では、カンボジア人は昼頃の暑い時間は昼寝、シャワーなどで休むから昼頃も私たち研修生を連れまわさねばならないガイドさんはかわいそう、とおっしゃっていた。日本では「昼頃は暑いから働かない」なんて言い訳は通用しないだろうが、カンボジアではそれが当たり前なのだ。また、市場で働く人々がご飯を食べながら客を待っていたり、TUKTUK の運転手が呼び込みを熱心に行わずただひたすら乗客を待っているなど、私にはもう少し熱心に働いてはいかがなものか、と感じられる場面にも多々遭遇した。

あくまでも私が感じたことではあるがカンボジア人は日本人に比べて比較的のんびりと、働いているようである。日本人の私は、多くの国民がもっと勤勉に働けば自国の発展が促されるはずだ、と考えずにはいられなかった。ただ、これは勤勉な労働＝自国の発展＝満足というステレオタイプに基づく私個人の（あるいは多くの日本人の）考え方であり、別の考え方もできるはずだ。私が考えた別の考えは、「自国の発展のために勤勉な労働をすることは、満足なことなのか」ということである。

カンボジア人は自国の発展にどれだけ身を尽くすだろうか。先に述べたような自国の未発展部分を知っていても、これを改善するために今よりも熱心に働こうとするのだろうか。これを考える上で見落としてはならないのが、「未発展」なのは先進国諸国と比べた相対的な尺度であり、自国民による絶対的尺度とは必ずしも一致しないということである。交通ル

ールが厳密に守られていなくても、現在の交通でなんら不自由を感じていない、あるいは不自由があろうと交通はこういうものだと割り切っている人もいるだろう。そのように考える人は、交通の改善のためにあくせく働くよりは、現状の交通のまま、現状の労働時間、労働姿勢のままでいいと感じるだろう。むしろ、交通整備のために現状のルール、道路を改正することはライフスタイルの変化を強いられることになり、有難迷惑になりかねない。同様のことが、交通整備以外の「未発展」部分にも当てはまる可能性がある。

私たち先進国の国民は、発展途上国の「問題」を考える前に、その「問題」が当国民にとって本当に「問題」となっているのか、ゼロベースで自信に問い直す必要性があるだろう。解決しなければならないと感じられる現状が、実は当事者にとってはそれほど「問題」ではなく、むしろ解決に付随するライフスタイルの変化のほうが「問題」となる可能性は大いにあるからである。このことを知り、理解したうえで当国民にとって本当に「問題」となっていると判断されるのであれば、先進国諸国は支援を行えたらよいと思う（支援を行えたらよい、とややあいまいな書き方をしたのは、必ずしも先進国国民が発展途上国の支援を行うべきだと考えるとは限らないからである）。それが、先進国の自己満足ではない、発展途上国の国民のためになる本当の支援になると思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【自分の目で見て感じたこと】

長崎大学 医学部 3 年生

私がこのツアーに参加しようと思った理由は「自分の目で世界を見て感じたい、学びたい」と考えたからである。実際、12 日間、ベトナムやカンボジアでその国の歴史や医療、教育、産業などの様々な方面から１つの国を見ることで様々な学びがあった。

私は現在、大学で医療や福祉、公衆衛生について学んでいるため、このツアーに参加する前は医療や福祉、公衆衛生を中心に見て、文化や歴史などはついでに学べたらなと考えていた。ベトナムに入国して数日は、学びも多く、充実はしていたけど１つ１つの研修先の学びが独立していて理解できないことや、繋がらないことがあった。それは、私の知識不足からでもあるが、１番大きな要因は、１つ１つの研修先を分野で分けて考えていたからではないかとツアーの前半が終わるころになって気づきました。ツアーの後半からは知識も増え、１つの研修先で疑問に思ったことは今まで行った研修先で学んだことから紐解けないか考えるようになった。もちろんそれだけでは疑問が解決できない場合もあったが研修先で積極的に質問する、仲間と疑問を共有してディスカッションをするなどしてベトナム、カンボジアという１つの国をいろんな視点から見て、学ぶことができた。特に「国が持つ歴史や文化を学ぶことは重要で国が現在抱えている問題や国民性に必ず繋がりや影響がある」ということが１番の学びだった。カンボジアの医療の発達が遅れているのは、内戦で医者などの知識人が虐殺されたことや内戦により、戸籍が消失したこと、そのことから医療保険のシステムが整っていないことなど「カンボジアの内戦」という歴史が影響している。このことは、カンボジアの歴史を知らないとわからないことだと思う。医療だけではなく教育などの他分野でもカンボジアの歴史や文化が影響している面が多くあり、色んな分野に影響している国の持つ歴史や文化を学ぶことはその国の成長・発達を促進する上で重要であると思う。だからこそ、カンボジアの子どもたちには自分たちが暮らしているカンボジアの国について学んでほしいと思った。そのためにも、教育の整備が今のカンボジアにとって最重要なのではないかと思った。

このツアーに参加する前はカンボジアについて少しの知識しかなく、発展途上国のイメージが強かったが、ツアーを終えた今、「カンボジアは歴史や文化の影響から生まれた問題を持つが、これからそれを乗り越えて発展していく可能性を持った国」という認識に変わった。これからカンボジアがどんな国になっていくのか楽しみで仕方ない。私もなんらかの形でカンボジアという国に関わっていけたらよいなと思えた１２日間の研修だった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジアでの気付き】

立正大学 経済学部 4 年生

私がこのベトナム・カンボジア 2 カ国研修に参加した理由は、発展し続ける日本で幼少期から当たり前のように学校に行って授業を受け、友達と戯れ、帰ればご飯があり、『幸せ』が当たり前になりすぎていて『幸せ』を感じる事を忘れていると思い、もし、孤児院や貧困で苦しんでる方々を見たら、自分が置かれている環境に感謝し、何もかも『幸せ』と感じる事が出来るんではないかと思ったからである。つまり『不幸』な現状を見て、自分がいかに『幸せ』な状況下にあるという事を確認したかった。

実際に孤児院・日本語学校・病院・支援団体・日本企業を訪れると、私の『幸せ』という言葉に対する価値観は一転した。

特に印象深かったのが、日本語学校と孤児院の出来事だった。日本人への憧れと尊敬から、入った瞬間から大きな拍手で迎え入れられ、何か言い終わると「お疲れ様です」と礼をしながら言葉を発し軍隊のようであったが、誰も嫌な顔せず笑顔で行っていた。そして、私の「日本のトイレ・新幹線について」を説明すると、時折拍手が鳴り響いて楽しそうに聞いてくれた。その際に、カンボジアの子供達は学校に行ける・勉強が出来るという事が当たり前では無いから、それ自体に喜び・幸せを感じているんだと感じた。日本ではどうしても、当たり前になりすぎていて、学校に行ける事自体に対しての有難みは薄れている気がする。

また、「夢を聞かせて下さい」と質問したところ、嬉しそうな顔で「日本語を覚えて日本人にカンボジアを紹介したい」や、「自分で起業して日本とビジネスを成功させたい」終いには「日本に行ってみたい」などという言葉を聞いた。追加で「飛行機に乗った事がある」か問うと、全員無かった。経済的な理由で飛行機にも乗る事が出来ない学生たちが、それを理由に勉学を諦めるのではなく、貧困だからこそ、経済的に自立したいという気持ちで大きな夢を持ちその夢に向かって頑張る姿勢に私は胸が熱くなった。

訪れる前は恣意的に貧困・発展途上国＝勉強しない・夢を持たない・不幸、と勝手に思っていたが、全く違う事に気付かされた。

孤児院では、親がいないから『不幸』とこちらも勝手に思い込んでいたが、私たちが孤児院に入った瞬間から笑顔で私たちの腕を取り、彼らの言葉であるが、話しかけてきた。「この子たちが本当に親に捨てられたのか」と疑ってしまうほどの元気さだった。遊びでも、水風船やサッカーなどで駆け回り、常に笑顔で振るまっていた。微塵も『不幸』だという事を感じなかった。むしろ、日本の同年代の子供たちより、人懐っこいし、笑っていた。

このツアーで私は『幸せ』とは、人と比べるものではないし、その人自身によるものだと改めて考えるようになった。私が未熟者なせいで途上国でご飯も衛生環境も悪いからすべて『不幸』なんだと勝手に偏見を持っていたが、現地の学生・子供たちは今の私たち、日本の学生より一人一人が大きな夢を持ち日々勉強していたし、孤児院でも同年代の子供より、

笑っていた。彼らは彼らなりの『幸せ』というものを持っていた気がした。

今までの私は先進国に身を置いているという安易な理由で、無意識のうちに途上国に対して上から目線でいる事に気付かされた研修であった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ひとの豊かさとは】

九州大学 農学部 4 年生

今回のカンボジア研修では実に様々なところを訪れ、普段成し得ない貴重な経験をした。この 8 日間を通して考えたのは、「ひとの真の豊かさ」についてである。

幼い頃から日本で生まれ育ったわたしたちは気づけば手の届くところに必要な物があり、求めれば求めるだけ、あるいはそれ以上に与えられてきた。一方、カンボジアに最新のゲーム機や娯楽施設はそう多くない。この二者を比べみたとき、多くの人は後者を貧しい、と言うだろう。

だが、「カンボジアの暮らしは豊かである」というのがこの研修を終えた私の感想である。「カンボジアの人たちは今あるものを大切にし、今ある暮らしに満足して生きる」そんな印象を受けた。目が合えばいつもにっこりとした笑顔が返ってきて、仕事の合間にジョークを交えながら観光客との交流を楽しむ。必要以上の物を渇望することもなく、仕事のないときはゆっくり休み、子が親を、親を子が慈しみ、学校にはいじめも少なく個々の存在を尊重し合う。そんな毎日のなかで自分の人生を自分の納得のいくように過ごしているように感じた。カンボジアの小学校で「夢」について聞いたとき、多様な夢が次々でてくるので驚いた。そして、それを本当に楽しそうに語るのだ。その光景をみて、「日本の子供たちに夢をこんなにらんらんとした目で語ることができるのだろうか」と空虚な思いになり、思わず想像するのをやめてしまう程であった。

もちろん、カンボジアのなかには十分な教育を受けられない人、明日を生きていく食糧がない人、仕事がなく家族と離れざるを得ない人もいる。そういった人たちに対しては力のある国や諸外国が手を差しのべ、改善していく必要があると考える。でもそういった人も含め、カンボジアは「謙虚」と「感謝」にあふれていた。

日本の人は見栄や世間体にいつも縛られ、なんのためかもわからずこなし作業のように毎日いわれた勉強をし、心身を犠牲にしてまで働き、家庭を顧みない人もいる。果たしてどちらが本当に「豊か」といえるのだろうか。私は、よりこころが豊かなのは前者であり、先進国である日本がカンボジアに心して学ぶべき点だと考える。

私は中学生の頃テレビで見た「物がないけれど心から家族をいたわり、毎日をキラキラ過ごす東南アジアの子供たちの姿」が忘れられず、一度その子達と実際にふれ、言葉を交わしたいと切に思っていた。今回、一緒に遊んだり意見を聞いたりすることができ、これからの自分のやりたいことを見つけ、実現していくにあたって大切な財産になった。

私は、将来的に家庭と子供の関係を根本的に解決するあたらしい仕組みづくりをしたい、と思い描いている。子供が自分の存在を肯定できず、人や動物を慈しむことができないのは、本人の問題ではなく、複雑な家庭環境によるものであり、家庭環境はすべての人格形成の基礎になると考えるからだ。そこを改善していけば国全体の奇怪な犯罪も減少し、多様性の受

け入れ方もかわっていく、と考える。そのなかで、今回の経験は大変刺激的なものであった。かれらの慈愛の心はどうやって育まれるのだろうか。「足りない」生活のなかでどんなときに幸せを感じ、どんなときを大切に日々生きているのだろうか。結局、それらの答えを見つけることもできず、帰国の日を迎えてしまった。だが、今回得たことを大切な軸のひとつとして、今後も自分の思いを実現するために多面的に勉強し、力を付け、大願成就したいと思った。

機会があればカンボジアや近隣諸国を訪れ、またこのような豊かさにふれたい。今回はこのような素敵な場をつくり、もりあげてくれた皆さんに心より感謝する。本当にありがとうございました。これらを社会に還元できるよう、今後も精力的に頑張っていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアでの経験を通じて】

北九州市立大学 文学部 2 年生

今回、このスタディツアーを通して、カンボジアから感じたことは、「生きる」ということだ。この研修で多くの側面からカンボジアという国を見た。その中で、生きるための教育や生きるための仕事など、すべて「生きる」ということが中心にあったと感じた。カンボジアは裕福とは言えない国である。仕事がなくゴミを拾って生活する人、観光地に来ている観光客に物を売り生活費を稼ぐ人などその日を生きるために、必死でお金を稼いでいた。定職についている人ばかりではないため、その日暮らしという印象を受けた。その人たちを見ていると「生きる」ことが生活の中心であった。日本で暮らしている私は、「生きる」ということを強く考えたことはなかった。そこにカンボジアの現状を痛感した。

この研修では、教育が重要なキーワードであった。日本語学校、インターナショナルスクール、農村部の学校など様々な教育現場を視察した。最初に日本語学校を訪れたとき、私は衝撃を受けた。大きな声の挨拶と、礼儀正しい学生の姿を目の当たりにして、圧倒された。日本の学校で、あれほど大きな声で元気よく挨拶する学生の姿は見られない。素晴しいの一言であった。そこで私は、その学生へプレゼンテーションをする機会があった。生徒の前にたったとき、生徒のとてもキラキラした目が印象的だった。私の発言する言葉一つ一つに大きな反応を示してくれて、学ぼうという意欲がすごく伝わってきた。本当に話していて気持ちいいと感じた。日本では体験できないことだと思う。カンボジアの学生の学ぶことへの意欲が伝わってきた日であった。次に、インターナショナルスクールと農村部の学校を視察して、格差を感じた。インターナショナルスクールでは、校舎のきれいさ、生徒たちの制服、教科書、文房具など、裕福な家庭の子供であることがわかった。年間の学費、教師の充実、すべての設備がそろっていた。それに比べ、農村部の学校は、教科書、制服はなく、野外に建てられた学校と違いを目の当たりにした。今、カンボジアでは教育が重要視されている。しかし、今の子供たちの親は教育を受けていない人が非常に多い。読み書きでさえできない人もたくさん存在する。その親は、教育の重要性を認識できていない。そこがカンボジアの教育現場の問題点でもある。特に農村部では、その傾向が多いようである。農家で育つ子供に教育は必要かと疑問に思う親も少なくない。そこも都市部との教育の格差が生じる原因であると感じた。しかしこれから生きていくために教育はカンボジアにとって非常に重要なものであると思う。次世代を担う子供たちの教育制度を充実させる必要があると感じた。都市部にいる裕福な家庭の子供だけでなく、カンボジアにいる子供全員が、しっかりした教育を受けることのできる制度がこれから大切であると思う。カンボジアでは農業と観光業がしかない。特に観光業で発展していこうと政府は考えている。そのため、言語の教育が充実している印象を受けた。日本語学校やインターナショナルスクールでは、母語であるクメール語以外に、日本語や英語が話せる学生は多く存在した。これから「生きる」ための教育

が充実しているという印象を受けた。

今回多くの教育現場を視察して、教育の格差の問題など問題点はあるが、カンボジアでは「生きる」ための教育が普及しつつあり、生徒たちも「生きる」ために一生懸命に勉強していることが分かった。日本に目を向けたとき、日本の教育制度は整っているものの、その制度を無駄にしているように感じた。義務教育が９年間あり、「生きる」ためではなく、やらされているという感覚で、教育を受けている人が多いと感じた。私もその一人である。義務教育だから勉強して、実際学校の勉強は社会では必要ないと感じ生きてきた。カンボジアを視察して、私は本当に今まで何をしてきたのだろうと思った。何十年も教育を受けてきたが、英語も話せない、社会で使える知識も身につけられていない。無駄な生活を何年続けてきたのだろうと感じた。カンボジアでは教育制度など、まだ十分でない部分もあるが、日本の何倍も身になる教育を受けていると感じた。カンボジアの教育問題を考えて、見えてきたものは日本の教育問題であった。日本は、制度は充実している。しかしその教育を社会で活用するためと、何人のひとが考えながら勉強しているのだろうか。「生きる」ということは当たり前で、何もかも整った何不自由なく生きているからこそ、気づけていない教育の重要性を、日本で考える必要があると感じた。カンボジアを視察することで、日本を見つめなおすいい機会になった。また自分を見つめなおすいい機会でもあった。

カンボジアの人々と交流し、私はとても恵まれていると感じた。何不自由なく、生活できて、勉強できて、望む生き方ができる。それが当たり前と思いながら生きてきた。しかし、それは当たり前ではなく、本当に幸せなことであった。この研修を通して、「生きる」ということのありがたさを感じた。そしてなんでも努力でできる環境にいるのだから、もっとやりたいことをして、がむしゃらに生きたいと思った。自分が生まれた環境は恵まれている。だからこそ、その環境に感謝し、カンボジアの人のように一生懸命、一日一日を生きていこうと思う。このツアーに参加して、カンボジアから多くのことを学ぶことができた。本当にいい経験だった。他国を見ることは、自国を見ることと同じだ。日本は素晴らしい、カンボジアはまだ発展途中と感じていた、研修に行く前の考えを大きく変えた一週間。お互いの国がそれぞれから学び、成長していけたら、より良い国になっていくだろう。本当に濃くて素晴らしい体験をいた研修であった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで学んだこと】

北九州市立大学 法学部 1 年生

私がカンボジアで学んだことは大きく分けて２つある。

１つ目は、カンボジアは決して貧しい国ではないということだ。私の中でカンボジアという国は「貧しい」という考えがどこかにあった。初めてカンボジアに足を踏み入れたときも、発展している日本と比べて見てしまっていた。街を歩いている人の服は薄く、靴じゃなくサンダルを履いている人の方が多かった。この光景を見たとき、私は「日本に生まれて良かったな」と考えていた。しかし決してカンボジアが貧しい国というわけではなかった。なぜ私の考え方が変わったのかというと、『アリとキリギリス』のお話を聞いたからだ。『アリとキリギリス』の内容は、アリは夏になると、冬のための食べものを自分達の家にせっせと運んでいるがキリギリスは優雅に歌を歌って過ごしている。そのうち冬になってキリギリスは食べるものが無くなってしまい、アリの家に食べものをもらいに行くが断られてしまう。今、楽をしているなまけ者は、そのうち痛い目にあうというお話しだ。このお話を聞いたとき、キリギリスの食べものが無くなったのは自業自得のように思え、アリの生き方が素晴らしいと考えた。しかし、「カンボジアに冬はこない。歌手だって毎日歌って生活をしている。キリギリスがなまけ者だという証拠はどこにもない。」という言葉を聞いたとき、とても納得した。私は今まで「カンボジアは貧しい」というある意味偏見を持っていたが、カンボジアの人達は過ごしやすいから薄い服を着ていたり、暑いからサンダルで生活をしている。どれも快適に過ごすための工夫であり、カンボジアの人達はそれで満足しているということが分かった。ここから、「日本から見たカンボジア」だけでなく、「カンボジアで見るカンボジア」のような価値観の多様性の大事さを学んだ。

２ つ目は、歴史を学ぶ大切さだ。私はカンボアジアに行く前に『キリング・フィールド』という映画を観た。正直、カンボジアにこんな歴史があったことは知らなかった。未知の私が、実際にカンボジアで歴史を学ぶことは多くあり、どれも衝撃的なものばかりだった。生きては帰れず、「死ぬのが一番」という考え方に至ってしまうトゥールスレン収容所や約６００円で地雷を作ることができ、その地雷が今でも残っているという事実、ポルポト政権など、カンボジアの人達がこれまでに経験してきたことはとても悲しく、辛いことだったのだと思い知らされた。今、カンボジアで生活している子供達は、カンボジアの歴史についてあまり知らないそうだ。上に立つ支配者の力の強さで変わってしまったカンボジアの歴史、地雷で失われた命のことなどを勉強して、また次の世代に伝えていってほしいと思う。

このツアーで学んだことはたくさんあるが、この旅で素敵な人たちと出会えたことが何よりの思い出だ。普段、他大学と関わる機会がないため、このツアーを通して出会えたことにとても感謝している。一人ひとり考え方も、ものの見方も違い、積極的に自分のものにしようという姿勢が大事だとわかり、今までの自分の生活を反省した。何事にも受け身ではな

く、積極的に物事に取り組んでいこうと強く決心した。

日本に帰ってきて、「楽しかった？」と聞かれることが多かった。確かに楽しかったが、それだけを伝えるのではなく、自分が学んだ価値観の多様性や教育の大切さも一緒に伝えていこうと思った。このツアーを通して学んだことをこれからの生活に生かして、社会に貢献できる人になりたいと思う。

このツアーに参加してよかったと心から思う。JAPF の方々をはじめ、このツアーに関わっている方々、両親、出会うことのできたメンバーにとても感謝しています。ありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【私の目で見たベトナム・カンボジア】

創価大学 国際教養学部 2 年生

私がこのスタディツアーに参加したのは、「ベトナム・カンボジア」と聞いてなんとなく貧しい国、支援によって成り立っている国、という印象があり、そんな国では何が本当に必要とされているのか自分の目で見てみたいと思ったからである。実際に見たベトナム・カンボジアは私の想像を超える発展を遂げており、人々の幸せそうな表情が印象的で、やはり自分の経験から学ぶことの大切さを感じた。そんな二つの国の色々な研修先でお話を伺ったり現場を見たりする中で思ったのは、歴史の影響がいかに大きいかということと、教育がすべての根底にあるのではないかということだ。

ベトナムとカンボジアどちらの国も、ベトナム戦争、カンボジアの内戦という 1970 年代まで続いていた戦争の歴史がある。戦争によってたくさんのものを失ってからまだ 40 年ほどしかたっていないベトナム・カンボジアについて学ぶ中で、戦争という負の歴史がその後の国の成長に大きく影響しているということがわかった。カンボジアでは内戦中の大虐殺の影響で 40 代以上の人口は少なく、町中でもおじいさんおばあさんを見ることはあまりなかった。また、現在の親世代の方々が子どもの頃は戦争中で学校に行くことが出来なかったため、彼ら自身が教育の重要性を理解しておらず、今彼らの子ども達が学校に行かなかったり途中でやめてしまったりしている原因の一つとして考えられている。今までは、歴史は過去の事で進歩するためには現状を知ることや先を見据えることが大切だと考えていましたが、この研修で学ぶ中で、様々な課題は歴史や文化と深く関わりあっており、それらを無視して成長することは出来ないということを感じた。

また、教育の重要性を改めて感じる研修となった。公立や私立の学校や日本語学校、孤児院など子ども達と触れ合う機会が幾度となくあり、その時にこれからのベトナム・カンボジアの成長を支えていく人材を育てていくために教育を充実させること、子ども達が自由に夢を語ることが出来る環境の大切さを感じた。カンボジアでは、内戦時の影響もあり教師の地位が低く給与も安いため、人数が足りていない現状を目の当たりにした。また、小中学校の連携が取れていないために生徒の学力に差がある事、親が教育の大切さを理解していないため学校に通い続けられない子ども達がいることなど、日本にいるだけでは知ることが出来なかった事実を知った。日本で生まれ育った私にとって学校に行くこと、自由に夢を持つこと、その夢を叶えるために勉強をすることは当たり前の事ですが、それが当たり前でない子どもたちがまだまだ世界にはいることを知った。今の子ども達がこの先の国の成長の基盤となるため、これから国を豊かにしていくためには教育制度を強化していく必要があると思った。

問題を理解・解決するためには歴史に対する知識が不可欠であることと、若者への教育が国の未来につながっていることを感じる研修となった。歴史や文化に優劣はなく、それぞれ

の合理性があって成り立っていることがたくさんある。日本のやり方が必ずしも他国で良いとみなされる訳ではない。だから私たちは、何かを与えてあげるという姿勢ではなく、相手を知ろう、良いところは学ぼうという姿勢で、互いに良い影響を与えられるような関係を築いていくべきだと思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【８日間のカンボジアスタディツアーで学んだこと】

大阪大学 法学部 １年生

今回のスタディツアーは私にとって初めての海外であり、とても刺激的な毎日であった。私が想像していたカンボジアとは全く違う世界が広がっていて、いかに自分が浅はかであったかを痛感した。

カンボジアは、発展途上国であり貧しい国であると言われている。私も、カンボジアに行く前は、「日本よりも発展していない国」というような、今考えてみると少し見下したような考えを持っていた。しかし、実際にカンボジアを訪れてみて、決して日本より劣っているわけでもなく、日本よりも良いところがたくさんある国であると感じた。確かに、道を歩けば、小さな子供や大人たちが何かを売ろうと近寄ってきたり、交通の整備がなされていなかったり、他の先進国よりも発展が遅れていることは事実である。しかし、カンボジアの人たちは、決して心まで貧しいわけではなく、むしろ日本人よりも豊かな心を持った人がたくさんいたように思う。

ツアーで訪れた日本語学校の人たちは、私たち日本人の話を目をキラキラさせて、大きなリアクションを取りながら必死に学ぼうとしていた。私たち日本の大学生の学ぶ姿勢と比べると大きな差があった。

また、孤児院や農村の小学校で出会った子どもたちは、決して恵まれているとはいえない環境であるにもかかわらず、生きることに対する希望が満ち溢れているように見えた。純粋に大人がすることを必死に真似をしようとし、やってみようと頑張る姿、友達や私たち日本人と遊ぶ時のはじけるような笑顔は何ものにも代えがたい、絶対に守っていかなければならないものであると感じた。

そして、私は現地で出会ったたくさんの日本人の方達の、行動力と勇気と思いやりに感動した。異国の地で働くには、たくさんの苦労があるし、発展途上国であるカンボジアではたくさんの問題に直面するであろうと思う。それにも関わらず、自分がやりたいことを信じ、カンボジアという地で活躍している彼らはとてもかっこよかった。

今回のスタディツアーでは、新しい価値観や世界観に触れることができる貴重な体験をすることができた。この経験を、今後の人生に生かし、どうすれば自分が世の役に立つことができるのか、しっかり考えて生活していきたいと思う。

【スタディツアーで学んだこと】

近代姫路大学 教育学部 4 年生

今回の旅では、多くの戦争跡、博物館、病院、孤児院、国の施設など普段の観光では、決して入ることのない場所に多く行け、様々なことを考え、学ぶことができた。私は、この旅で「平和」について考え今後の生活、仕事に結び付けられればと考え、旅をしてきた。

平和とは、穏やかで何の変りもなく安穏で、戦争がないことだと辞書には書いてある。果たして、これは、世界共通なのだろうか。そうすると、日本は、とても平和な国である。しかし、本当に平和だといえるだろうか。そこで私は、カンボジアやベトナムで会った方々に「平和」について聞いてみた。

多くの方が同じようなことを言ってが、ある方が「自分の国を自分で守ることのできる国」ということをおっしゃっていた。以前の私は、軍隊という制度があることに反対であった。しかし、確かに自分の国を自分の力で守れなければ、守ってもらうしかない。守ってもらうということは、お金も被害も大きくなるかもと今回の話を聞き感じた。ベトナム戦争に関しては、アメリカ対ソ連の戦いにベトナムにより、犠牲になり多くの市民が亡くなり、多くの被害が出た。例えば、枯葉剤、地雷、爆弾などベトナムだけで、何とかしていれば決してこんなに大きな被害にはならなかったと感じた。自分の国を自分で、守ることができることこそ、国として自立でき、平和ということが言えるのかなと感じた。

また、「自分の意見をきちんということのできる国、不正がない国」ということをおっしゃっていた方もいた。現在、カンボジアやベトナムでは、言いたいことを言えない政治になっているらしく政治をクリーンに、言いたいことがきちんと言える政治になっていけばよいと考える。また日本も、この点に関しては、できていないと考える。より良い世界にしていくためにも、表現の自由が大切にされればと思う。

私は、この春から自衛隊に入ることが決まっており、日本の平和・世界の平和に携わる。その前に本当にカンボジア・ベトナム（発展途上国）に行くことが出来良かったと思っている。カンボジアは、日本が初めて PKO 活動を行った国であり、自衛隊が世界への社会貢献貢献という大きな一歩を踏み出した国であるため働くにあたり身が引き締まり、私もぜひ PKO 活動に参加し、多くの国の方々の役に立ちたいと改めて感じることが出来た。そして、平和を守るという仕事への決意を固めることが出来た。この四月から是非頑張って訓練に励みたいと思う。

このスタディツアーを通し、多くのことを学べ、多くの方と会うことができた。NPO 活動をされている方、平和のために日々活動される方、孤児、他大学の学生など、私が、普段かかわることのない方々の話や意見を聞くことにより、自分の考え方をさらに大きくすることが出来、何よりも、自分自身の知識のなさを知ることが出来た。さらに、多くのことを学びこれからの生活につなげていきたい、また多くの方に会い、考え方の多様性を学び、視野

を広げていき、自分の意見が正しいのだと押し通すことのない柔軟性のある心を持ち、他の考え方も尊重できるような人になりたいと思う。この旅を通し、少しだけではあるが成長できたと思う。

最後に、この１２日間という短い期間の中で、本当に濃い時間を過ごせ、皆様のおかげで素晴らしく充実した旅ぜひまたになりました。本当にいい方々と出会い良い経験が出来たことを感謝します。ありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジアスタディツアーを通して】

北九州市立大学 外国語学部 １年生

私がこのスタディツアーに参加したことで得たものは２つある。１つ目はベトナムとカンボジアの現状についての知見だ。文献やインターネットで容易に得られる情報では知り得なかった現実を目の当たりにし、現地の声を聞くことができた。やはり内在する問題が表面化することは難しく、内から発信していかなければならない。この２か国では急激な発展をするなかでおざなりにされている事柄が多い。国の中の人間がそれを問題視することさえできていないのではないかとさえ感じられた。そもそも私たち日本人からすればこの２か国に足りないと感じるものは多いが、彼らにとっては自国にいまあるものがすべてであり不足感はないのだろう。だとすれば、彼らが置かれている状況からさらに生活が豊かになり得ることに気付けていないのも無理はない。足りないものに気付き、国民は必要性を訴え、政府は適切な政策を打ち出すべきだ。その気付きを与えるのは日本だけに限らず先進国諸国のやるべき事であり、自国に合った選択をすることは途上国自身がやるべきことだ。そうしなければのし上がっていくことはできない。政府には経済的自立の実現と国民の生活を豊かにする国づくりをしていく責任がある。国民は政府にこの責任を果たしてもらうため政府に協力し、政策が間違った方向に進んでいたり、不満があれば声をあげる責任がある。JICA でお話を聞いて、寛容さが招く無意味な支援や二度手間ほど無駄なことはないと思った。本当に必要な支援を国で選別する力をつけることもこれから求められている。様々な分野の研修先を訪れることで２か国が抱える問題やその内的、外的要因を学んだ。また政府と国民、都心部と農村部、富裕層と貧困層、高齢者と若者、健常者と障がい者などそれぞれに格差や認識のかい離があることも学んだ。そのギャップを埋めていくためするべきことは山積みのようだ。

２つ目は仲間だ。毎日同じことを学んでいても問題のとらえ方や視点が違う仲間たちの意見を聞くことがとても楽しかった。ディスカッションを通して積極的に自分の意見を言うこともできるようになった。交換日記で文字に起こすことで頭の中で考えていてもまとまらなかった思いをまとめることが出来、仲間のコメントで新しく気付けたこともあった。１２日間という短い期間だったが、とても濃く有意義な時間を共有できた仲間に感謝している。目指す場所や頑張る場所は違っていても、みんなを思うと力をもらえる。

ツアーのなかで戦争が残した癒えることのない大きな傷跡を自分の目で見たことによって、私自身の戦争に対する考え方が変わったことは大きな出来事だった。正直、未だいくら考えても消化しきれない思いが残っている。また、途上国に関わっていく覚悟が確固たるものになったわけでもない。しかし今回学んだことで知らなかったほうが良かったことなど一つもない。むしろ知らないまま生きていくほうが怖い。これからは事実と現実を見つめ、いまの自分に出来る最大限の努力を考え自分のするべきことに取り組んでいきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【研修で学んだことについて】

奈良教育大学 教育学部 3 年生

私はこの 12 日間の研修の中で本当に必要な「支援」とは何かについて考えることができた。支援金や物資を送る、施設をつくるだけではなく、その国に住む人達自身が国を支える力を持たなければならないのだと思った。それは「授人以魚　不如授人以漁」という中国の言葉にも通じるところがあると感じた。どのような力をつけた人を育成していくのか。そのためには安定した「教育」の場が必要であり重要である。教育の基盤がしっかりと保障されていることで、様々な分野で活躍できる人材を育成することが出来ると同時に、政治や法・制度など自国を支える政治基盤そのものを見つめ直すことが出来るからである。

研修中では様々な施設に行った。その中で様々な国から援助を受けている国立の病院に訪問したとき、支援物資としてもらった医療器具が壊れて、「直せない」からという理由で廊下に無造作に置かれているのを見た。一言で教育といっても色々な分野がある。医者の数が足りないからといって、医療関係の教育の場を増やしたとしても、その人たちが扱う機械を直す人がいなければ、それはその国の医療が自立したとは言えないのではないか。そのように様々な分野を総合的に考えながら、教育の場を作っていく必要があると感じた。

また農村近くの学校でも話を聞いた。その中で心に残っているのが、子どもの両親に対して教育の重要性をわかってもらう必要があるということだった。カンボジアは気候が温暖で農村では一年中作物がとれ、食べるのには困らない生活が送れる。だからこそ勉強することに意味を見出すことは難しいのではないかと思う。授業参観や運動会など地域一体となって教育の場をつくったり、キャリア教育を行ったりして、教育の場が安定して子どもに保障されればと思う。そうした中で、自分の力や、自国の課題を見つめ、医療や産業などの様々な分野で活躍できる人材が育成されるのではと感じた。

一方支援されることがカンボジアの人にとって本当に幸せなのか、ということは常に意識しなくてはいけないと思う。日本は今支援している側にいるが、もっと他国と協力して支援活動を進めるべきだと感じた。

そして私自身この研修後どうしていきたいか。私はこの研修が始まるまで、カンボジアやベトナムについてはあまり知らなかった。カンボジアの内戦についてはほとんど知らない状態であり、ベトナム戦争についても過去のことだと思っていた。しかし枯葉剤に苦しむ人や内戦の影響で人材育成ができないなどの影響や被害は今だ続いている。私は将来教育関係の仕事につきたいと思っている。その時に子どもたちに今回見たこと、感じたことを話したいと思う。カンボジアやベトナムがたどってきた歴史を風化させたくないからだ。ある国は貧しいから一方的に助けるのではなく、互いに助け合っていくのはどうしたらいいのか考えられるようになってほしい。そのためには私自身もっと勉強しなくてはならない。今回学んだことを生かして次の学習へと役立てたいと思った。同時に今回の研修は様々な学部

の人がいて、たくさんの意見を聞くことができた。もっといろいろな人と話したり見聞きしたりする経験が必要だと感じた。ベトナムの平和村やカンボジアの農村など、現地の子どもたちと交流する機会もあったが、みんな夢があったり、願いがあったりしていて、その子たちの可能性や思いが蔑ろにされない、そんな世界になればいいなと思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアのスタディツアーに参加して感じたこと】

早稲田大学 文化構想学部 2 年生

このスタディツアーに参加した一番の動機は「カンボジアがどのような国なのかを知りたい、見てみたい」という単純なものだったが、実に様々なことを学び、あらゆることを考えたツアーとなった。それらを上手く総括することが難しいため、研修先を一つ一つ振り返っていくこととする。

カンボジアに行って改めて日本という国の立ち位置を知ることができた。カンボジアの空港で、到着する旅行者を一番に迎えた広告の企業が Panasonic だったのが強く印象に残った。街中にも日本企業やその看板が多く並び、ホテルや研修先の中でも日本企業の製品を目にすることが多かった。日本語学校で学ぶ生徒になぜ日本語を学んでいるのかを尋ねると、日本の企業で働きたいからと答える生徒も多く、カンボジア国内における日本企業の影響力の強さ、魅力度の高さを感じた。

また、カンボジアに援助をする日本人の多さに驚いた。カンボジア人の方から、「あれは日本の援助で出来た橋だよ」と教えてもらったことがあったし、日本のイメージについて尋ねられた私立学校の生徒は「カンボジアを助けてくれる国」と答えており、そのような認識をされていることに驚いた。また、カンボジアで社会起業家として人生をかけているクラタペッパーの倉田さん、アキラー地雷博物館で日本語ガイドのボランティア活動をしてらっしゃる川上さん、私財を投げ打って日本語学校を立ち上げた方もいることを知って、そのようなひとたちと同じ日本人であることを勝手に誇らしく感じた。

第二次世界大戦後の、大戦を踏まえて世界が平和に向けて動き出している時期にも関わらず、残虐で、前時代的な、恐ろしい出来事が起きたという事実に人間が変わることは出来ないのだろうかと感じた。加えて、それが、大国の代理戦争との解釈することもできることを知り、やりきれない気持ちになった。

「人間の二面性」というのを改めて実感した。前述したように、自分以外の誰かの幸せのために人生をかけて奔走することができる人間の性も真実であるし、残虐行為を行うことができる人間の性もまた真実である。両方の性質を持ち合わせていることを認識した上で、自分の中の良い方の面を前に出す人生を送りたいと思った。

「本当の支援とは何か」という言葉は本ツアーのポスターに載っていた言葉である。何か誰かに役立てることをしたいと思っていても海外でボランティア活動をしているひとたちのはなしを聞いていても常々「それは本当に役立っているのか」「何のためにボランティアをするのか」「偽善なのではないか」と感じていた自分にとって、この言葉にすがる思いで、何か１つの答えが出るのではないかと思ってツアーに参加することに決めた。しかし、ツアーを終えた今も「本当の支援」についてハッキリとした結論を得ることはできなかった。

なぜならそれは、「カンボジアが貧しい国だ」という認識自体、わたしたち独自の価値観

のフィルターを通してみた印象にしか過ぎないということをクラタペッパーの倉田さんのおはなしを聞いて知ったからだ。それでも、カンボジアという国にはまだまだ問題が山積みで、困っているひとも多くいる。このツアーを通して学んだあらゆる視点からの知識を使って、自分なりの本当の支援をこれからも考え、実行していきたいと思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【JAPF2017 年春期二ヶ国インターンシップに参加して】

北海道教育大学　教育学部 2 年生

ベトナム、カンボジアで過ごした 12 日間は、今後の学びについて考える大きなきっかけとなった。この貴重な経験を以下の 4 つの観点から振り返る。

ベトナム 2 日間とカンボジアのトゥールスレン収容所やキリングフィールド、アキラ―地雷博物館では「平和」について学ぶ場面が多くあった。ベトナムの戦争証跡博物館でベトナム戦争の実情と被害について学び、南ベトナム解放民族戦線で使用されたクチトンネルを視察し、平和村では枯葉剤被害を受けた子どもたちと交流した。書籍で目にしたことはあっても、実際に被害の現状を自分の目で見ると衝撃が大きかった。カンボジアのクメール・ルージュは約 40 年前に起きたとは思えないほど悲惨で、その事実が国民の意識下では故意に忘れる方向に働いていることに日本との違いを感じた。私の母親は戦後 25 年経ってから生まれたが、当時の日本では今と変わらず、戦争教育が為されていたと聞く。カンボジアでは「知ってしまうことの方が恐ろしい」という考えが優先されているが、過去を知らないことが同じ歴史を繰り返すことに繋がるのではと不安を覚えた。

日本人経営の KURATA ペッパーでは、カンボジアの一次産業の現状と発展について考える機会があった。農業で国内の経済を発展させる、という考えに感銘を受けたが、ディスカッションで理想論と感じるという意見も聞き、多方面から物事を見つめる必要性を感じた。カンボジア王国観光省では、国家が今以上に三次産業を発展させることを目標としていることを知った。JICA プノンペン事務所では、国民の自立を促し、観光客が訪れやすいように保健医療やインフラの整備を行っている。

しかし、後日視察に訪れたゴミ山で、現状のまま観光産業を発展させていくことでカンボジアに与える悪影響について考えざるを得なかった。国内で発生するゴミの 8 割は自然に還るが、残りは観光客が排出するペットボトルといったゴミは環境汚染に繋がる。リサイクル整備が乏しいカンボジアで、観光業を推進し続けた場合、環境問題の発生は時間の問題だ。観光客が環境について認識を改める必要もあると考え、アンコール遺跡群の修復体験や農村視察のようにエコツーリズムの要素を取り入れていくことが有効と考える。観光省から交通整備の懸念があるが、観光地周辺ならその心配も少なく、環境保護要素の強いプログラムを実施することが可能だろう。

複数の病院を視察し、シハヌーク病院 HIV 病棟やコサマック病院などの国民にとって身近な医療機関で受診することが出来る医療の限界と、日本からの支援で建設されたサンライズ病院の最新設備とのギャップを目にした。医療従事者の不足と医療機材のメンテナンスが課題として挙げられ、国内の医療の質を向上させるためには不十分な教育現状であることがわかった。

活動中に最も重要だと感じていたのが「教育の重要性」である。CCH 孤児院で生活する子

どもや水上学校の生徒と、私立の NEWYORK International School の学生では受けられる教育の質は大きく異なり、平和教育や産業における貧富の拡大、医療現場の課題など全てにカンボジアの教育事情が関わっていると感じた。今後国内の経済状況が向上し、貧富の差が拡大していくことにより、教育現場が抱える課題は増加する。そのために、良質な教育を受けることが可能な国民はその能力を教育面で自国に還元していくべきと考える。他国の人材支援に頼るのではなく、自国民が教育現場を改善していくために、教師の労働条件や教育にかかる金銭的負担の見直しが必要である。

また、TAYAMA 日本語学校の視察が印象的だった。中国系企業の流入が増加している今、日本語学校がカンボジアでどれほどの重要性を持っているのかと考えていたが、ただ語学を学ぶことが目的ではなく、日本人以上に文化への理解があり、日本が成長の目標となっていることが嬉しく、誇りに感じた。

活動に参加するにあたって私自身が設定した目標は「自分の視野・知見を広げる」である。日本全国から集まったメンバーと過ごした時間は得るものが多くあり、現在の学びに対する姿勢を考え直す機会となった。学ぶ分野の異なる学生の意見はとても勉強になったし、自分が勉強できていることのありがたさを実感した。新年度が始まるが、この経験を忘れず、自己の学びをより充実させるために尽力していきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで学んだこと】

徳島大学 医学部 1 年生

まず、カンボジアに行って思った事はとてもカンボジアの人は温かいという事である。どこに行っても私たちを笑顔で迎えてくれた。道で会う人と目があうとみんながニコッと笑ってくれた。ポスターなどで見る写真は険しそうな顔をしているのが多かったため、もっと険しそうな顔をして見てくるのではないかと思っていたので驚いた。でもこれは偏見であったと気づいた。倉田さんに勝手にカンボジアを貧しい国と決め付けるなと言われた時にハッとした。私の価値観で勝手にかわいそうとか思っていた自分が恥ずかしくなった。でもこれは現地に行かなかったら気づけなかったことなので今回このツアーに参加して、今このことに気づくことができてよかったと思った。またこのことによって私の考え方も大きく変わった。

カンボジアの子どもたちはどこの学校に行っているとかにかかわらず全員から勉強したいという気持ちが感じられた。勉強することが楽しくて仕方がないという姿が私には眩しかった。知るということは楽しいというシンプルだけどとても大切なことを改めて教えてもらった気がした。私ももっと勉強しようと思いった。

カンボジアの問題やカンボジアのこれからについてディスカッションをしたり、自分で考えたりしたが問題が大きすぎたりとなかなか答えは見つからなかった。また、答えを出せるほどの知識が自分にはない事に気づいた。でも答えがでないからといって考えることや学ぶことをやめてしまうことは違うと思う。まずは知識を増やすところから始めようと思う。

ツアーのメンバーにはいろいろと刺激をもらった。みんなの積極的な姿勢や、自分の意見をしっかりと持っているところなどすごいなと思うと同時に自分はまだまだだなと思い知りった。でもそんな人たちとディスカッションや話をできたのはすごく楽しかったし良い経験になったなとも思った。

今回のツアーでは絶対に忘れてはいけない光景やお話がたくさんあった。これをただ楽しかった思い出にするのではなく、今後に生かしていかなければいけないと思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム、カンボジア研修を終えて】

鹿児島大学 法文学部 2 年生

この２週間程の研修を終えて、やっぱり自分はまだまだ、物事を一面的にとらえがちだなと思った。支援＝正しいこと、経済成長＝国民の幸せ云々、確かにある面から見ればそれはそうかもしれないけれど、違った視点から見ればどうだろうか。支援は先進国のエゴとなっているのでは？経済成長が貧富の差を拡大させているのでは？先進国に行くのと違い、途上国に行くのは、そのような「ものごとを多面的に考慮する」能力を養うことができるというメリットがあるなと思っている。

この研修の良いところは、個人的な旅行では絶対にできない経験にあると思う。旅行では訪問が難しい場所に行き、様々な立場の人から様々な観点からの話を聞く。その話について疑問や意見をぶつけ、リプライを得ることができ、また研修の参加メンバーで議論ができる。自分はこのような一連のサイクルをとても有意義に感じたし、大学に通うだけでは絶対に味わうことができないと感じた。同じことについての話でも、話し手の立場の違いによって様々な見解を聞くことができた。どれが正しいというわけではなく、いろいろな考え方をすることができるということを学んだ。

自分は前に一度ベトナムに行ったことがあり、そのときは、インフラ整備が課題で他国からの支援などによって早急に進めるべきだと思った。しかし今回カンボジアの農村での話を聞いて、少し考え方が変わった。上下水道も電気も通ってない農村には、幸せの形がちゃんとあった。ガイドの方も言われていたように、この生活を農村の方々は幸せだと感じており、インフラの整備なんて必ずしも求めてはいない。自分のそれまでの考え方は先進国に生きる人間の少し偏った考え方だったなと思わされた。今回の研修では「幸せ」の形について考えさせられる機会が多々あった。幸せとは一体なにか、国民みんなが幸せであると感じられる国の形とはどのようなものなのか、いくら議論をしてもきりがないくらい難しい問題ではあるけれど、実態を肌で感じた上で、それについて考えて議論をしたというのはとても良い経験だったと思う。今後もいろいろなところに行って「幸せ」について考えたいと思う。

また、印象的だなと感じたのは、人々の温かさである。ベトナムでもカンボジアでも、行く先々で大人から子供まで自分たち日本人を非常に歓迎してくれた。特に子供たちからは、その上物凄く活気を感じた。TAYAMA 日本語学校をはじめ、公立の学校、私立の学校、地方の学校、どこに行っても高い学習の意欲をもった学生たちがいた。同時に意欲は同じなのに、教育自体に格差があってはすごくもったいないことだと感じた。「教育」という分野はカンボジアにしてもベトナムにしても今後の国の行く末を占う大切な問題だと思う。まずは国全体として教育の大切さを認識するところから初めて、しっかりとした地盤固めをする必要があるかなと思う。

このような有意義なプログラムを準備してくださったスタッフの方々にはとても感謝し

ている。今回インプットしたことをアウトプットしていきたいと思っている。今までは与えられる側だったのを今後は与える側に、そのような活動をやっていきたい。１２日間ありがとうございました。お疲れ様でした。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【春期インターンシップスタディーツアー２ヵ国】

大阪府立大学 生命環境科学部 1 年生

私は今回、JAPF の春期インターンシップスタディーツアー２ヵ国に参加した。この研修において私はベトナム・カンボジアについて歴史・文化・産業・教育について学ぶことができた。実際にベトナム・カンボジアに行くことで、日本の支援や援助が実際どのようであるか、国際的に支援を受けている国の現状について五感で感じることができ、またそこで暮らす人々や子供たちとふれあうことで文章だけでは学べない「心」についても感じることができたように思う。中でも特に印象的であるのは、胡椒の栽培・輸出を通してカンボジアを再び栄えさせようとする KURATA　PEPPER の取り組みとサンライズジャパン病院の「医療の輸出」についてである。両者に共通するのは、日本人が主体となってカンボジアへの支援を「ビジネス」として成功させている点であると私は考える。KURATA　PEPPER はカンボジアの産業を伝統的農産物である「胡椒」のブランド化によって立ち上げていこうとする会社であり、私はその志の高さに感服した。サンライズジャパン病院では高品質の日本の医療をカンボジアに「輸出」する形をとっており、カンボジアの医療を品質の面で引っ張っていこうとする病院であるように私は考えた。また、子供たちの教育格差問題も深刻であるように考えられた。比較的金銭的にゆとりのある家庭の子供たちが通っている New York International School と、そうでない農村・孤児院では教育内容や設備、先生の数等の教育格差が歴然としており、今後のカンボジアのさらなる発展のためにもこのような教育格差はなくさなければならないと考えた。

今回の研修で感じたこと・学んだことを忘れずに今後も是非ベトナム・カンボジアと関わっていきたいと思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジア 2 ヶ国研修】

立命館大学 経営学部 2 年生

僕がこのツアーに参加した理由は、東南アジアに行ったことがないし、普通の旅行よりたくさんの事が学べるかなという程度の考えであった。実際にこのようなツアーは初めてで、全員初対面だったので楽しみな部分もあったが不安な一面もあった。みんなとても良い人たちで、初日からすぐに打ち解けることができたためその不安は吹っ飛んだ。

まずベトナムに着いて驚いたことが都会はとても発展していたということである。雰囲気は台湾に似ていた。そして通貨がドンとドルと一緒に使われていることにも驚いた。ベトナム、カンボジアを合わせても現在でも枯れ葉剤の影響を受けた人たちが暮らしているが、枯れ葉剤の影響を受けて生まれてくる子供は減ってきているそうだ。この原因として考えられるのは医療の発展で、エコーを使って生まれてくる前のお腹の中の赤ちゃんが障害児なのかどうかを判断できるようになったからだ。そのため潜在的な数を考えたら枯れ葉剤の影響は薄まってきているのかは、明確には分からないということに深く考えさせられた。僕の中で印象に残っているうちの一つである Kurata ペッパーでは、カンボジアのことだけでなく会社経営のことも学べた。Kurata さん自身の体験から日本で勝負するのではなく、まだビジネスチャンスとしてあまり注目されていないカンボジアでやっていこうという考え方はこれから生きていく上でとても勉強になり、Kurata さんのような生き方もあるのだと刺激を受けた。日本で起業したりするにしてもやっぱり発想力は大事だと思った。

毎日研修を終えホテルでグループごとに与えられたお題についてディスカッションする時間は、仲間の意見も聞けてとても充実していた時間でもあった。法に詳しい人や支援のことについて大学で学んでいたり、バックグランドが違った人の意見は自分にとってとても新鮮で考え方の幅が広がった。研修で学ぶだけでなく、アウトプットの大切さをこのディスカッションで学んだ。そのうちの一つである「カンボジアは日本色に染まっていいのか」というテーマではとても考えさせられた。ポルポト政権の時の虐殺によってカンボジアの歴史は無くなってしまったため受け入れることも大事だし、色んな国の文化が混じってカンボジアの文化になっているという結論になった。カンボジアに対しての支援もそうだが、何がカンボジアにとっていいのかというのは必ずしも正解はないし、とても難しい問題だと思った。

今回の研修では、まず、カンボジアは貧しい国ではなく、お金がなくても生きていける国だということが分かったが、それと同時にまだまだ道路や病院などのインフラ整備は課題だと直接肌で感じることができた。本当に必要な支援をするには直接その地に訪れる必要があると思った。この二か国研修で自分の幅が今までより広がり、この経験をこれから活かしていけたらいいなと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジア・ベトナムで学んだ事】

関西学院大学 法学部 1 年生

カンボジア・ベトナムの二か国では、平和・医療・養育・産業など様々な分野について学んだ。研修に行く前は、特に平和の分野に興味があり、実際に研修に行くことによって、戦争が終わって間もない国の雰囲気や、その国の考え方・課題を学ぶことが出来た。

ベトナムでは、枯葉剤の影響を受けた子供たちに実際に会うという経験が、私にとって一番衝撃的だった。教科書で学び、事実だけを知っていた頃よりも「戦争」という事を肌で実感できたように思う。この子たちは実際に生きていて、存在し、その背景にある戦争も本当に起きたことなんだと、強く感じた。また、ベトナムの人々が考える「戦争」・「平和」が、第二次世界大戦が終わって 70 年以上も戦争を経験していない日本人の考え方よりも、もっとリアルなものなのだと感じることがいくつかあった。

例えば、ガイドの方がバスの中で、ベトナムの歴史について話されたとき「平和を守るため、戦争の準備をしなければならない」と言われた言葉が印象に残っている。現在の世界情勢についても、アメリカの大統領はオバマ氏よりもトランプ氏がいい、習近平国家主席がベトナムを訪問した時、“Get Away”の看板を国民が立てたというエピソードは、多くの日本人の感覚とは違うものだと感じた。ドクさんが「平和とは何か」と質問された時、一番初めに「独立がある国」と答え、次に「経済発展のある国」「他国の戦争に行かない国」と言われたことも、印象的であった。

ベトナムでの平和学習で学んだ事は、日本での平和に対する主流の考え方は、他の国とは違うこともあるときちんと認識しなければならないという事だ。多様な価値観を認め合うことを日本でも教えられるけども、実際に外に出て、現地の人の言葉で感じる事が大切であり、それが本当の「理解」に繋がると思った。

カンボジアでも、戦争に関する様々な場所に行きましたが、ベトナムとはまた違う印象を受けた。カンボジアは内戦が終わってまだ数十年の国で、国民がまだ自国の歴史に目を向けられていなかったり、国民自体まだ知らないことが多すぎて、再建の途中の国という印象を強く持った。外国から様々な分野で、たくさんの支援を受け取っていても、カンボジアという国が一つになってビジョンを立てられていないように感じられ、支援だけが先に進んでいっていると感じた。支援も必要だし、国を成長させることも必要だけれども、外から支援する立場として、「善意の押し付け」にならないようにしなければならないと思った。カンボジアについては、知らないことも多く、自分の知識不足を痛感したので、もっと勉強して理解を深めたいと思った。

私は、平和の分野を特によく考え、興味を持っていたが、この研修では教育や産業などを勉強している人たちと議論ができ、学ぶことが多くあった。一日の終わりのディスカッションでは、その日に感じた事やその国の課題に対して、自分では思いつかないような視点から

の意見が飛び出し、とても刺激を受けた。

12 日間を通して、カンボジア・ベトナムの現状を知り、また色々な人達と関わることでたくさんの事を学んだ。私にとってかけがえのない経験になり、これからの大学生活に繋げていきたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【スタディツアーに参加して】

琉球大学 農学部 3 年生

このツアーに参加して、発展途上国へのイメージは一転した。発展途上国は、どこの国の真似もしておらず、独自の生き方や文化が強く残っていて、日本よりも魅力的だと思う部分があり、他国の真似ばかりして先進国になった日本のようにはならないでほしいとすら思う。その国らしさを尊重しつつ、発展し、良い国になってほしいと思う。しかしながら、良い国とは何か。ここで、良い国とはどういう国のことなのかという疑問が生じる。

「日本のようにはならないでほしい」と前述した。では、日本を悪い国だと思っているのかといったら、そうではない。私は、日本は良い国だと思っている。では、なぜ、日本のようになってほしくないと思ったのか。

まず、私が思う、日本の良い点をあげよう。それは、治安が良いこと、貧富の差に関係なく一定以上の治療が受けられること、技術力が世界に評価されていること、世界的に見て裕福なこと、和食が世界無形文化遺産に認められたこと、等が思い浮かぶ。日本をこういう視点のみからみたら、治安が良く、独自の文化を大切にし、おまけに世界からも認められているという、模範のように素晴らしい国で、ぜひとも、他国も真似してほしいと思う。

では、次に、私が思う、日本の悪い点を挙げよう。欧米の真似をしている、自殺率が高い、出る釘は仲間外しにされる、子育てに冷たい、外国人や障害者、LGBT 等への差別が強い、毎年 13 万匹を上回る動物を殺処分している、詐欺が増えている、同じ日本であるはずの沖縄を平等に扱わない。もし、日本をこういう観点から見たら、息苦しく、こんな国には絶対に住みたくないと思う。中でも、自殺率が高いというのは、現代の生活スタイルが日本人には合っていないことをあからさまに伝えている。日本人のための日本のはずなのに、生きづらく、自ら死んでしまう人が増えているなんて、なんのために日本があるのか分からない。そして、こういう生活スタイルになってしまった原因の 1 つが、日本が発展しようと思ったときに、欧米の真似をしてしまったことにあると私は考える。今抱えている問題は、かつての日本では問題にすらなっていなかったこともある。例えば、LGBT。歴史的に見ると、日本は昔から寛容な姿勢を取っていた。それにも関わらず、現在は、社会問題になっているのだ。また、子どもが泣いたり騒いだりして、冷たい視線を送る社会でもなかったはずである。

ここで、結論に移るが、カンボジアは、現代の日本が失っている独自の文化、生き方、があり、カンボジア人が生きやすい世の中になっている。しかし、医療や教育の機会を受けられるかが、貧富の差で決まってしまっているという変えるべき現状もある。だが、先進国諸国の真似をしていったら、独自の生きやすい文化を失ってしまうかもしれない。だから、十分に模索して、文化を尊重しながら発展していく道を進むべきだと考える。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ＪＡＰＦ　ベトナム・カンボジア２か国研修を終えて】

奈良教育大学 教育学部 3 年生

このツアーでの私の一番の目標は、色々な文化や価値観を知ることだった。ベトナムに到着して町にでたときから、早速日本と異なる文化に触れることになった。驚くほどのバイクの数の多さ、ネズミのようにすり抜けていく運転には目を奪われた。クチトンネルという、ベトナム戦争時に使われていたトンネルを訪れた。歴史という点からベトナムを捉えたとき、人の生命力は何よりも強いものであると感じた。国を守りたい気持ちや、家族や仲間を守ろうとする気持ちが、巨大なトンネルが作る知恵や力を生みだしていた。また、生まれて初めて本当の銃を撃つ体験をした。最初の１発を放ったときに肩にかかった衝撃は今でも忘れられない。殺す側の怖さを初めて知った。その怖さも知っただけに、枯葉剤の影響で障害を併せ持ち生まれてきた子供たちを見たときは、複雑な気持ちになった。例えどんな理由があっても、何の罪もない子供が被害を被ることはあってはならないと強く思った。

カンボジアで活躍する日本人の方にもたくさん出会った。私も海外で人的貢献がしたいと思っていて、今回のツアーで自分の将来ともじっくり向き合いたいと思う気持ちも強かったが、何か力になりたいという広い目的だけでは、どんなに願ってもその国にとって何の助けにもならないということがよくわかった。支援の後どうしていきたいか、具体的なビジョンが必要だということが分かった。今まで、人の気持ちや考え方といった人間的な面から捉えることが多く、具体的に論理的に考えていくことが今の私に足りないことだと実感した。私たちが、カンボジアにおいて様々なことが足りないと思うのは、私たちにとって日本での生活が日常だからである。ＣＣＨ孤児院にいる子供たちは、日本の子供たちと何も変わらなかった。楽しいことが大好きで、たくさん体を動かして、好きなことに思いっきり打ち込む子供たちから、大人が学ぶことは多くあると思う。

ポルポト政権によって、知識のある者ほとんどが殺され、今のカンボジアには医者や教師が足りていないという事実を知った。これからカンボジアが発展していくためには、若い子供たちがしっかりと学校で学び、力を活かしていく循環を作ることが大切だと思った。そのためには、賃金をあげ、職業の価値を上げることが必要になる。教育の重要性を理解している大人が増え、すべての子供が平等に学校に通うことができる環境が保障されるときが早く訪れてほしいと願っている。

発展途上国の支援には中学生の時からずっと興味があったが、実際に自分の目で見て、肌で感じることができた今回の機会は本当に貴重だった。このことと同時に、１つの国を支えていくことや変えていこうとすることの難しさを感じ、今の私には大きすぎることだと思った。私は日本で教師になって、このツアーで見たことや感じた事を、多くの子供たちに伝え、様々な価値観を受容できる子供たちを育てたいと思った。いつか、私がもっと力をつける日がきたら、その力や経験を活かして海外の子供たちのために活かしたい。

【スタディーツアーでの学び】

同志社大学 法学部 1 年生

私はベトナム、カンボジアの二カ国研修に参加した。12 日間の研修の中で多くのことを学び、吸収した。そして、この 12 日間の中でたくさんのことを考えた。

カンボジアで私が特に印象に残ったのは、医療格差とカンボジア産の商品の少なさだ。

まず、医療格差の方については、国立の病院と日本人の方が設立した私立病院へ行ったが、施設の設備からまったく異なっていた。私立の方は日本と変わらない綺麗さだったが国立の方はたくさんの人が病室から溢れており、壊れている椅子がたくさんあり、ベッドも破れている質素なものだった。日本の国民皆保険が必ずしも良いものとは言えないかもしれないが、おなじカンボジアにいる人たちが同じくらい綺麗な施設で、同じくらい質の良い医療を受けられないのはなんとも心苦しいことだと感じた。もっとお金持ちの人からたくさん収入を得て、貧しい人にもうまく質の良い医療を提供できる制度が必要だと感じた。医療ではないが、アンコールワット遺跡では入場料が外国人は 4000 円と高いけれど、カンボジアの人はタダで入れるという制度があり、医療においても同じようなことができれば良いなと感じた。

次に、カンボジア産の商品の少なさについて述べる。スーパーに行った時にカンボジアのお菓子のお土産を買おうとしたが、ほとんどが中国産のものをそのまま輸入したものや、日本のものなどカンボジア独特のものというのが全く無いと言ってもいいほどなかった。お菓子だけでなくシャンプーなどの日用品においてもそうであった。JICA でも電気を隣国から輸入していて電気代が高いという話も聞いた。

カンボジアがこれらを自分で生産できるようになれば、必ずしも安定しているとはいえない観光業に頼ってしまっている状況から少しは脱することができるのではないかと考える。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアと日本のゴミ問題】

早稲田大学 教育学部 2 年生

今回のカンボジアスタディツアーで私はカンボジアの教育について学びたいと思い、参加していた。日本と比較するとまだまだ皆教育が進んでいない点や中退率の高さなどを実感した。この問題も今後のカンボジアの発展には非常に重要なものとなるが、それ以上に行く前には考えていなかったゴミ問題に衝撃を受けた。またカンボジアのゴミ問題は他人ごとではなく、日本においても考えていかなければならないことだということがディスカッションにおいて実感させられた。今回のレポートではゴミ山で感じたことや、帰国後に調べたことをまとめてみたい。

今回のスタディツアーではシェムリアップにあるゴミ山の管理者の方からお話を伺った。その中で最も衝撃を受けた発言は「ごみを埋めてそこに草を植えれば、昔ゴミ山だったことは分からなくなるだろう」というものだ。ゴミ山であったことは所々に出ているガスを排出するための管から明らかであろう。そこからは腐った何とも言えない匂いがする。それでもこのようなことを言えるという現実に、はじめてゴミ山を見たことよりも衝撃を受けた。管理者でも日本人が普通に考えたら分かるようなことが分かっていないということはそこで住む人々はどんなにゴミ山が健康に悪影響を与えているかを全く知らないでいるのかもしれない。

さてカンボジアのゴミはどのように処理されているのかをまず考えてみたい。まずこの国ではほとんどゴミの分別が行われておらず、「特に排出段階でゴミの分別は行われていないが、ストリートウエストピッカー等がリサイクル可能な品を戸別ごとに回収しに来ている」(1) という現状だ。またカンボジアではゴミの処理方法として「オープンダンプ方式」を採っている。これは集めたゴミをそのまま一カ所に集めて捨てる方法だ。そのため今回私たちが行ったゴミ山でも匂いはひどく、マスクをしておかなければ気分が悪くなってしまう。そしてこのゴミ山の中でリサイクルできる資源を探して、それを換金することで生計を立てている人（ウェイスト・ピッカー）がいるのも目の当たりにした。

日本のゴミ問題についても触れてみたい。なぜならカンボジアのゴミ問題は少し前の日本が抱えていたゴミ問題と似ているところがあるからだ。日本では比較的昔からゴミの処理には力を注いでいた。これは日本では湿気が多く、ものが腐りやすい環境であることや、都市への人口の集中が早くから起こっていたため、そこに住む人々が出すゴミの処理を考えていかなければならなかったという背景があるのだろう。松藤氏によると「1960 年代までは、発生した廃棄物を生活圏から排除することに主眼が置かれ、大都市を除けば直接埋立て（最終処分）が主流であった」(2) と日本のかつてのゴミ処理の方法について述べている。これは現在のカンボジアの現状に似ている。このようにかつての日本にもゴミ山は存在していたが、現在ではその姿を見ることがない。それも焼却技術の向上や資源化・再利用が進

んだことが生み出した結果だ。このことからカンボジアでも焼却施設の建設費、維持費などのコストやそれらの仕組みを作る技術があれば、カンボジアからゴミ山をなくすことは実現可能な事であることが分かる。またゴミの分別への教育もなされればそれをスムーズに進めることができるだろう。これはかつて同じことを経験してきた先進国が積極的に援助すべきことだと強く感じた。

前項で日本にゴミ山がないことを挙げたため、一見すると日本にはゴミ問題がないように思われるかもしれない。しかしそれは大間違いだった。これはゴミ山の視察へ行った日に行ったディスカッションでグループの一人が「日本は世界でもダントツでゴミを出している国なんだって」と発言した。確かにニュースで東京の最終処分場の残っている容量がもうわずかであるということは聞いてはいた。しかしその実感がわかずに、私は少し汚れたからといっては捨ててしまったり、もったいないとは思いつつ食べ物を残してしまったりなど簡単にものを捨てていた。いくら焼却施設が整備されても、最終的に焼却灰は残ってしまうこと、また燃やすことができないものはそのまま埋め立てるしかないのだ。そしてもし埋め立てることができなくなったらゴミ山が再び現れてしまうかもしれない。

カンボジアではまずゴミ山をなくすことが最優先されるべきであるが、日本ではさらにその先の「ゴミをなくす」ことが大切だ。先進国は地球のためにも後に続く国のためにも環境を守っていくロールモデルとならなければならない。そのためにもまず日本にいる私たち一人ひとりがなるべくゴミを出さないようにものを大切に使うことや包装を簡易なものにすること、食べ物は残さないなど簡単なことから始めなければならないと感じた。

今回のスタディーツアーで最も自分の生活と結びつけて考えることができたのがゴミ山視察だった。今でも心残りになっていることがゴミ山視察を終えてバスへ戻るときに靴をそのまま置いていったことだ。日本に持ち帰ったところで捨ててしまうもので、置いておけばそこにいる人たちが履いたり、売ったりして何らかの役に立つかもしれないが、それでもいずれはあのゴミ山の一部になってしまうのだろう。「ものを捨てる」ことがどんなことであるかを本当に実感することができた。私にとってこのわだかまりがこれから日本で生活するうえで、ゴミを増やさないという意識のもとになると思う。この思いを忘れてはならず、またこの体験を一人でも多くの人に伝えることでほかの人にもその意識を持ってもらうことがゴミ山に行って何かを感じた私の責任であると思う。

今回のスタディーツアーではほかにも多くのことを経験し、他大学の学生たちと一緒になって学ぶことができた。この機会を与えてくださった JAPF の方々や引率として私たちを率いてくださった野辺さん、現地ガイドの方々、そしてカンボジアの方々に感謝をして、このレポートを終わらせていただきたい。

参考文献：

(1) 東京環境公社「アジア諸都市の廃棄物処理状況」アクセス日 2017 年 3 月 9 日
http://www.tokyokankyo.jp/tokyoprogram/jp/asian-report

(2) 廃棄物学会『ごみ読本』p.14（中央法規出版、1995 年 10 月）

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで感じたこと】

大阪府立大学 生命環境科学部 1 年生

ポスターを見てすぐ、参加しようと思った。いや、絶対に自分は参加するだろうと思った。どうしてここまでカンボジアに惹かれたのか自分でも分からなかった。幼い頃テレビで見た、アンコールワットのイメージしかなかったというのに。

しかし、実際に行ってみて、カンボジアの魅力がすぐに分かった。それは人だ。カンボジアの人々は、会う人会う人皆、私達を見ると笑顔で手を振ってくれた。研修先として病院も訪問させていただいたが、そこでの患者さんやそのご家族の方でさえもだった。言ってしまえば「余所者」の私達にどうしてそこまで笑いかけてくれるのだろう。そこに、私は「本当の豊かさ」を感じた。日本は豊かな国だと思う。便利なもので溢れ、道路はきれいに舗装され、トイレやシャワーも何不自由なく使える。正直、カンボジアよりずっと快適に暮らせるだろう。でも、日本にも外国人観光客が増えているが、道行く外国人に笑顔で手を振ることができるだろうか。日本は物質的には「豊か」でも、心まで「豊か」とは言えないのではないかと思った。カンボジアの人々は、インフラが整っていなくても、悲しい歴史があっても「豊か」だ。それは、カンボジア人だからこそ持っている豊かさだと思うし、日本人が真似しようと思ってもできるものではないと思うが、私はカンボジアの人々に出会ってその器の大きさを少しでも取り入れたいと思った。

そんなカンボジアでも「子供の格差」は課題だと強く感じた。日本語学校、CCH 孤児院、New York International School、農村、トンレサップ湖の学校、そして町中…。このツアー中、いろんな所で子供を見た。その度に、働いていて学校に行きたくても行けない子、クメール語・英語・日本語まで話せる子、スマートフォンを持ってる子、写真を撮ることやプレゼントをもらうことにも慣れてない子、お母さんやお祖母さんと物乞いをしている子…。何気ない事、当たり前の事なのかもしれないが、私の目には全部差がついて見えてしまった。

どうして１つの国の子供たちの環境がこんなにも違うんだろう。平均年齢が２０代の国なら、日本以上に、将来をつくっていくのは子供達だから、教育を第一になんとかするべきだろう、と思った。どんな環境でも子供達の笑顔は変わらなくて私に力をくれたからこそ、そう強く思った。

１２日間、毎日新しい事に触れて、感じて、ディスカッションすることで自分の気づかなかった事にハッとしてまた学んで…。その連続で本当に充実した日々だった。北は北海道から南は沖縄まで、出身も専攻もバラバラの仲間達は、１人１人の個性が強く、楽しむ所は全力で楽しむが、勉強する時は貪欲で真剣だった。だからこそ、自分も頑張ろうと奮い立たせることができた。そんな仲間だけでなく、引率やガイド、運転手の方々、出会えた全ての人達に感謝したい。貴重な体験ができて、迷わずこのツアーに参加して本当に良かった。

誰かが「発展途上国はこれからどうなるか分からないから面白い」と言っていて、なるほどと思った。どんな国も、最初は先進国を見てそれを目標にしてきた。カンボジアだって１年後にはベトナムのようになっているかもしれないし、もっと先には日本のようになっているかもしれない。日本の良い所は真似してほしいが、カンボジアの良さを残したままでもいてほしいし、他の国がやってこなかった発展の仕方もしてほしい。時間をおいて数年後訪れた時にはどう変わっているのか、考えただけでもワクワクする。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジア スタディツアーを通して感じたこと】

同志社大学 法学部 2 年生

ベトナム・カンボジア スタディツアーを通して本当に様々な面から学ぶもの、得られるもの、感じたことが沢山あった。その中でも戦争、法整備の二点について感じ考えたことを述べる。

まずは戦争について述べる。ベトナムでは、ベトナム戦争に関する写真や保管物を展示している戦争証跡博物館を初め、南ベトナム解放民族戦線によって作られたクチトンネル、アメリカの枯葉剤による攻撃の影響を受けた子供たちとの交流からベトナムの負の歴史を学んだ。

カンボジアではポルポト政権時代のクメールルージュを残したトゥールスレン収容所、キリングフィールドの見学などを通してカンボジアの内戦について学んだ。

これらの場所を訪問して得たことを通して日本の戦争に関する博物館や、戦争そのものの捉え方の共通点と違いについて考えてみる。

まず大きな違いとして実感したこととして、写真や保管物をはじめとした展示品及び戦争に関する記述が非常にダイレクトであった点である。

私は中学校の修学旅行で沖縄のひめゆりの塔、高校の修学旅行で長崎の原爆資料館を訪問したことがあったが、当時を表す写真一枚を比較してみても日本は見学者に与える影響を考えてオブラートに包んであるような気がした。枯葉剤の影響を受けた胎児のホルマリン漬け、キリングフィールドで発掘された遺骨で埋め尽くされた記念塔など負の歴史の重みをより一層実感させられた。

違いの二点目はクチトンネルを訪問した際に感じたことで、我々は一致団結して戦い戦争に勝ったという誇りを持っていることである。

日本とベトナムでは、日本は戦敗国でベトナムはアメリカ軍を実質撤退に追い込んだ違いはあるものの、経済の停滞や枯葉剤による被害があるにも関わらず戦ったことに誇りを持っていることに驚いた。

次に共通点に関して述べる。日本とベトナム、それからカンボジアで共通して今後の課題として挙げられるのは戦争の風化である。

ベトナム戦争証跡博物館の展示品の数、平和村で保管されている枯葉剤の影響を受けた胎児のホルマリン漬けの数は年々減少しており、その背景にはベトナム政府による指導があると現地ガイドの方が仰っていた。カンボジアの内戦についても教育がまばらであったり、歴史を客観的に正しく伝えられていなかったり、そもそも知識層は内戦時に戦死しているといった点が挙げられている。

日本も戦後 70 年を迎え戦争体験者の減少による風化が問題となっているが、今回のスタディツアーを通して、まずは戦争について主観を抜いてありのままの事実を受けいれるこ

と、そしてそれを他の人たちに興味を持ってもらえるように発信し続けることが重要だと改めて実感した。ベトナムの戦争証跡博物館やカンボジアのトゥールスレン収容所、キリングフィールドで欧米の観光客を見かけることはあったがあまりアジア人を見かけることがなかった。自国の歴史に興味を持つきっかけとして、他国の負の歴史を知り自分なりの考え方を持つことが今の私たちにとって重要なのではないだろうか。

次に法整備がされていることの重要性について述べる。今回のスタディツアーの参加者は学部は異なるものの国際関係について学んでいる人たちが多い中、毎晩行われるディスカッションで国際関係について学んでいない自分はどのような視点で物事を見れるか考えた結果、法整備に着目した。

両国にはインフラ整備、交通整備、様々な面の格差、マネジメントをする人材の圧倒的不足など数えきれない問題がある。その土地が誰のものか、そもそも誰がどこに住んでいるのか未だにその国の実情が把握されていない。実情が把握されていなければ、国を整備する基本的なレールとなる法律を制定することが難しい。

普段大学で当たり前の様に学んでいる一つ一つの分野が、実は当たり前では無かった事を痛感すると共に、両国が本当の意味で成長していくにはまだ解決すべき問題は多い。法律を学ぶ身としては政府が産業の発展に力を注ぐ前に、もっと国全体に法整備が行われて欲しいと思った。

更に様々な国、団体からの多方面の支援がかみ合っていない問題に関しても押しつけのような支援をするのではなく、支援を行う側が話し合い指針を立て協力していくべきだと実感した。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナムとカンボジアが教えてくれたこと】

京都産業大学 法学部 2 年生

初めて訪れたベトナムとカンボジア。今回は観光だけではなく、勉強目的であり、観光目的だけでは絶対に行けないような施設、環境、そして人々に触れることができた。ベトナムとカンボジアはそれぞれ違う魅力を持っている。ベトナムはベトナム、カンボジアはカンボジアで分けて考えてみようと思う。

まず、ベトナムでは主にベトナム戦争や枯葉剤の影響について知ることができた。戦争証跡博物館が土台となり、クチトンネル及び平和村が加わり、一つの歴史を知ることができたのではないかと感じている。土台となった博物館はリアルな写真や武器等の展示物によって流れを掴むことができた。そこではアジア系ではなく欧米系の観光客が目立ち、興味や関心の高さを知ることができた。その他にも過去を知ることができる施設でも欧米系の観光客が目立った。そして、ホーチミン市から北西へ約 70 ㎞の場所にあるクチトンネルでは圧倒的な軍事力では勝てないような工夫を多く見ることができたと感じている。それはその地形を把握や人々の結束力等である。そして、市内にある平和村が特に印象に残っている。ホルマリン漬けされている赤ちゃんが入っているビンのラベルを見ると産んだ母親の出産時の年齢が若いことに驚いてしまった。日本では経済面や価値観の変化が原因で晩婚化が進んでいる。30 代になって結婚することが身近に感じてきているので驚いてしまった。平和村にいた子どもたちは障害があろうともそれを乗り越えて元気に明るく過ごしている印象が強かった。最後に市内の歩道に車やバイクを停めたり、バイクが歩道を走ったりが非常に目立つ。私の思いでは歩行環境を改善できるようなルール作りをしてほしい。

そして、カンボジアでは 1975 年から約 4 年続いたポル・ポト政権によって、教育、戸籍等が廃止、閉鎖といった社会不安が現在も経済格差や教育の悪循環を招いていることを目にすることができた。実際に教育を軸に、医療、歴史、観光、そして支援について学ぶことができたと感じている。やはり教育はとても衝撃的であった。農村部では学年が高くなるほど比例してドロップアウトの数も増える。教員数が不足しているという理由で自習をしていたクラスもあった。親の教育意識の低さや教師の給料等が深刻な問題であり、改善に進むような政策がまだない。都市部では、日本語学校や英語教育に力を入れたインターナショナルスクールを訪問することができた。国語、算数、社会といった科目以外にそれらの一歩先を行く教育を受けられるような施設があり、生徒数も想像していた以上に多くの生徒が在籍していた。双方を比べて感じたことは、農村部では大学相当までの教育を受けられるかもしれないが、年を重ねる毎に「労働」というが大きな壁が、教育を受ける道を塞ぐように思えてしまった。都市部は普通に小中高大学まで通うことや語学、ビジネス等を中心に学べる学校に通うことができるあらゆる「選択肢」があると感じた。誰がどこに住んでいるのかがわかるような戸籍制度があれば教育面が大きく変わるのではないだろうか。そして、支援の

あり方について考え方が変わった。ただの他者ではなく自分自身の自己満足による支援だと、学校という「モノ」や井戸という「モノ」だけで終わってしまい、短期的な支援で終わってしまう。長期的な支援にはそこに住む人々の生活サイクルや土地の把握、そして歴史を知ることが重要であり、いつかその人々が自ら管理や運営が行えるような「手助け」や「協力」ができるような支援が必要だと思える。

１２日間長いようで短かった時間であった。しかし、数多くの貴重な時間を過ごすことができたと帰国後、私はこのように感じた。12 日間の中で体調不良により海外の病院で診察して頂けたことも貴重な経験であった。何より 2 カ国で出会った子どもや学生たちの大きな夢や元気な姿、笑顔を見て聞いたりすることができたことも貴重な経験であり、思い出でもあった。大きな夢や目標をしっかり持つことを教えてくれた。そして、北は北海道、南は沖縄県から参加したメンバーたちと共に様々な分野について学び、答えのない哲学的なテーマについて多様な視点でディスカッションをしたこともとても良い経験になった。法律以外にも教育学や観光学等の知識を深めていきたい。それらは私の自身の今後の目標や課題を見つけるきっかけになったに違いないと今改めて感じている。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで学んだこと】

龍谷大学 法学部 2 年生

わたしがこのスタディツアーを通して学んだことは、「カンボジアは豊かな国である」ということだ。カンボジアへ行く前、カンボジアについての事前学習をしたが、貧困とは言わないもののカンボジアにはまだまだ教育を始めとしてたくさんの支援が必要で経済発展だって必要に違いない、そう思っていた。そして実際にカンボジアへ降り立つと整理されていない交通・たくさん落ちているゴミ、私はバスから目にするカンボジアの風景にどこがいけない、どこを変えるべき、そんなことばかりを考えてしまっていたように思う。

しかし初日の研修先 KURATA ペッパーで倉田さんが、「アリとキリギリス」のお話をして下さり、自分達が一つの固定観念に囚われていることに気付いた。働き者のアリが偉いわけではなく、音楽という芸術を楽しみのんびり暮らすキリギリスの人生だって別にいいじゃないか、アーティストと同じじゃないか、という言葉は私に衝撃的で、こんな考え私にはなかったため、新鮮であった。そして倉田さんは続けて、これと同じように日本人は毎日毎日働くけれど、カンボジアの人は時間をゆっくり過ごすしお昼寝だってするし、すごく発展している訳じゃないけど今のカンボジアにすごく満足している、そうおっしゃっていた。私は日本からみたカンボジアしか知らないから、勝手に日本がベストだと思い込み、日本のような経済発展・日本のような環境へと思っていた。しかし、カンボジア人にとっては今のカンボジア丁度いいのかもしれない、そこは私達外国人が勝手に口をだす問題じゃない、初めてそう思った。

それはカンボジアに限らずそうのはずだ。日本から見ていたらまだまだ足りないと感じることはたくさんあると思う。でも、それはその国にいってその国の人達の生き方を見て、意見を聞かないと本質はきっとわからないし、今の私達は色々と決めつけてしまっているのと思う。だから私はカンボジアに行き、海外との向き合い方を知った。

私は国際関係を勉強していて、他国の経済発展の為にはとか、たくさん毎日学び糸口を探している。でも、本当のことはその国にいかないとわからないと、心の底から感じた。だから、このことを今後の学びに生かしていきたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【2 カ国研修から学んだこと】

愛知淑徳大学 交流文化学部 2 年生

自分はこのツアーの個人目標を「カンボジア・ベトナムの歴史と今を実際に五感で感じこれから私たちがどうしていくべきなのかを考える」と立て、本当に私たちがするべき支援のあり方について学びたいと思いこのツアーに臨んだ。ツアーの中でベトナム戦争について、またカンボジア王国を多面的に学んでいくことを通して、目標は達成できたと思う。本レポートでは、ツアーを通して学んだ、自分の考えるカンボジアにおける今後の支援のあり方について述べていきたいと思う。

多くの日本人はカンボジアに対して、「発展途上国」というイメージを持っている方が多いと思う。自分も実際に行くまでそう思っていた。しかし、複数の学校や病院などを訪問し、日本を含めた先進国の ODA からの支援もあり、必要最低限のものは整っていることが分かった。いくつか例を挙げると、トンレサップ湖水上学校は今年度から中国からの資金援助を受けて、水上から陸へと学校を移していた。ゴミ山でも同様にフランスの企業がカンボジア政府と協力し、ゴミ山の環境を改善する取り組みも始まっていた。この現状を見て自分は、目に見えた支援はすでに始まっているものや、終盤に差し掛かっているため、新規でのこのような支援はもう必要ないと強く感じた。

一方で、今後は子どもがきちんと義務教育受けられるようにする制度を作ること、医療の保険制度をきちんと整えることのような法制度を整えていくための支援が必要になってくると思う。ツアー中、複数の小学校を訪問したが、どこの学校でも高学年に上がるにつれて、生徒数は減っていた。その理由としては家の仕事を手伝わないといけないからだそうだ。病院でも保険制度がないため、医療費が高く受けられる医療に格差がある状況だ。

教師不足、教師の賃金の低さも問題となっている。農村の学校を訪問した際に、教師不足から、授業中なのに授業しているクラスと自習のクラスがあるという現状を目の当たりにした。問題を解決するために日本のいくつかの団体も教師になりたい人に向けて教育支援をすでに始めているところもある。自分はこのような技術支援こそ今後のカンボジアに必要だと思う。

以上が、2 カ国研修で学んだ自分の考える本当の支援のあり方である。このことを学ぶ際に、歴史の大切さも感じた。カンボジアの歴史的背景をきちんと理解しておかないと、どうして教師が不足しているのか、賃金が安いのか、法律が整っていないのかきちんと理解できなかったと思う。そのため、ツアー中にベトナム戦争について学んだことやカンボジア内戦についての理解はとても大切だったと思う。